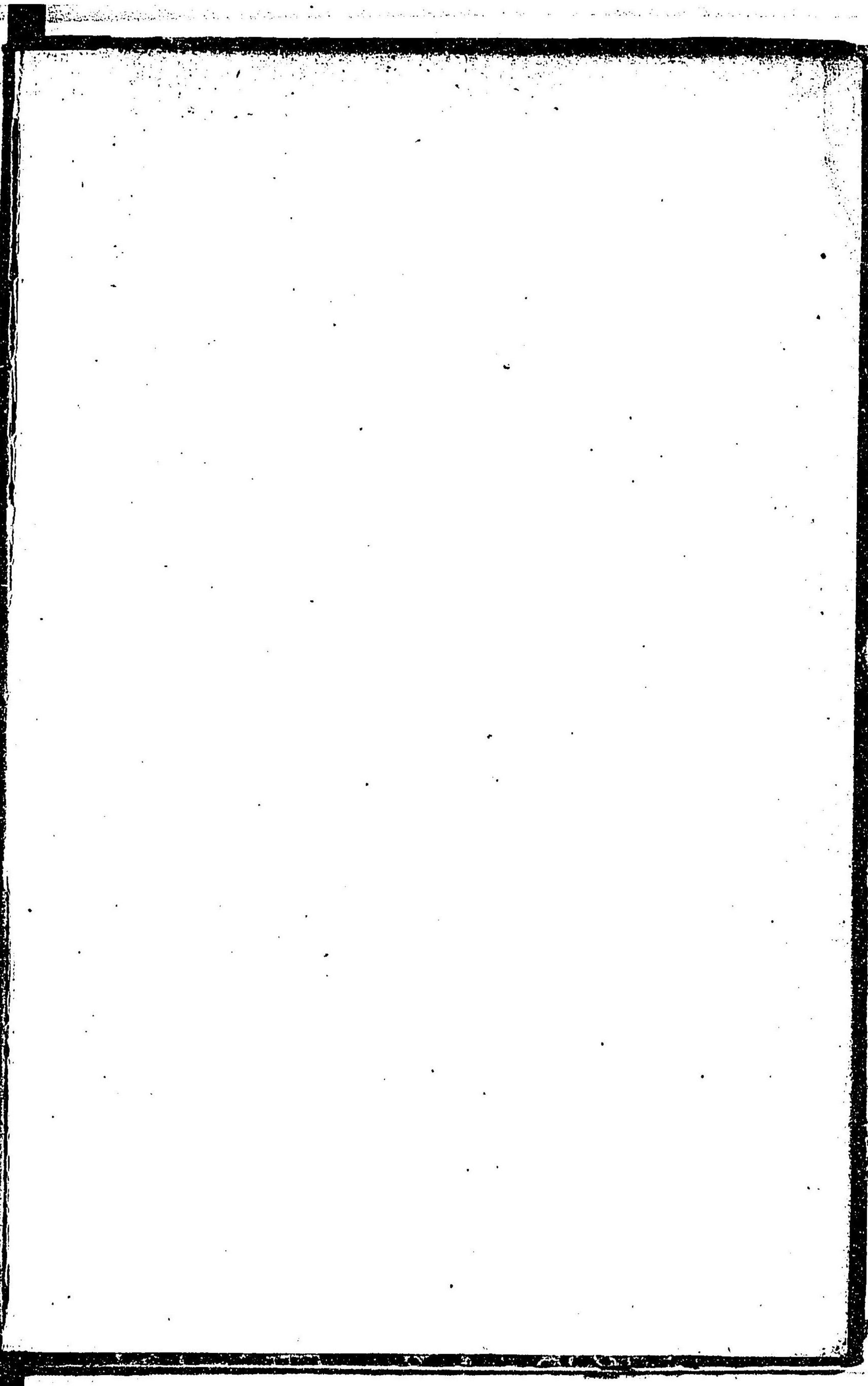
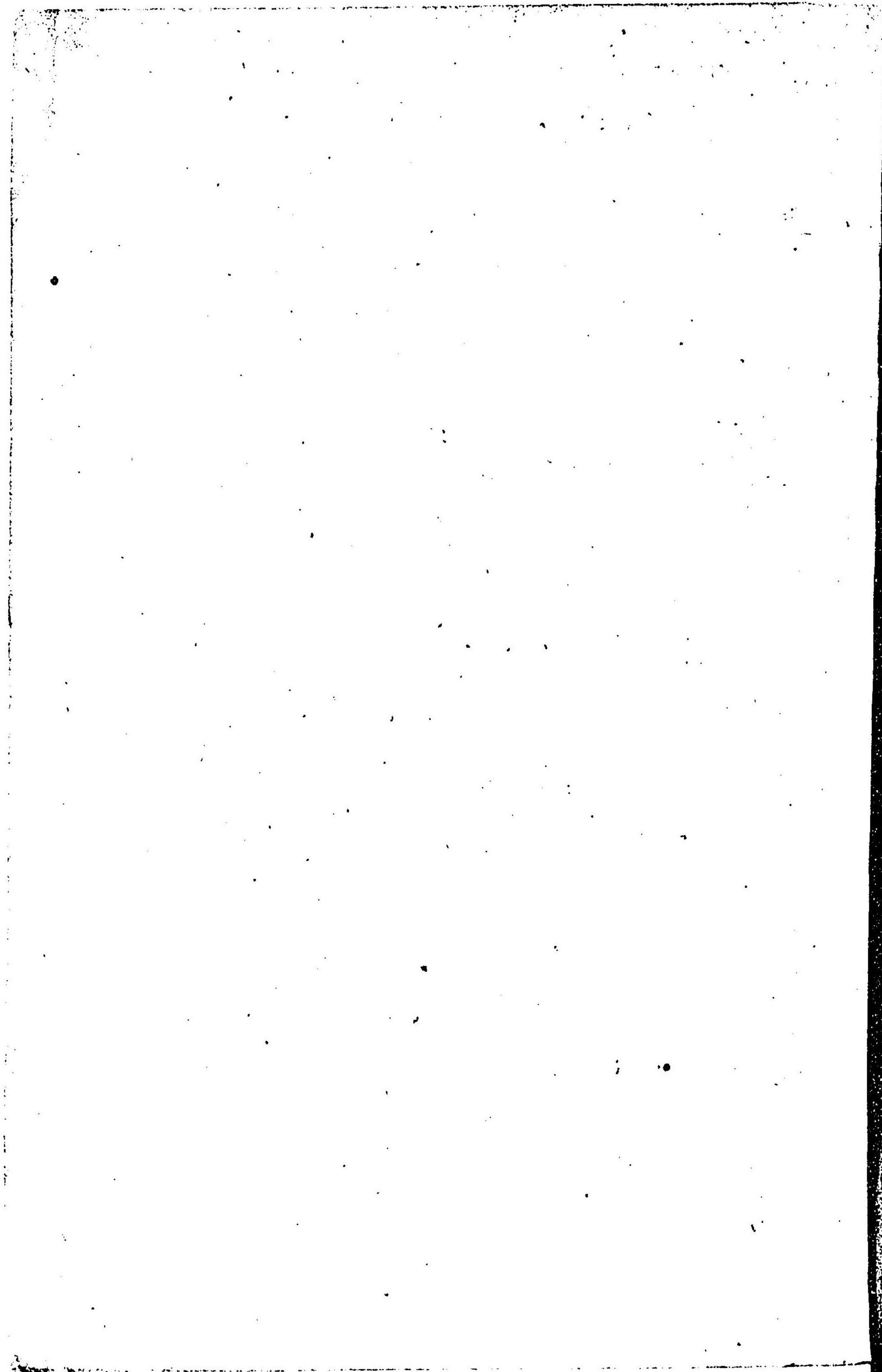


19

29

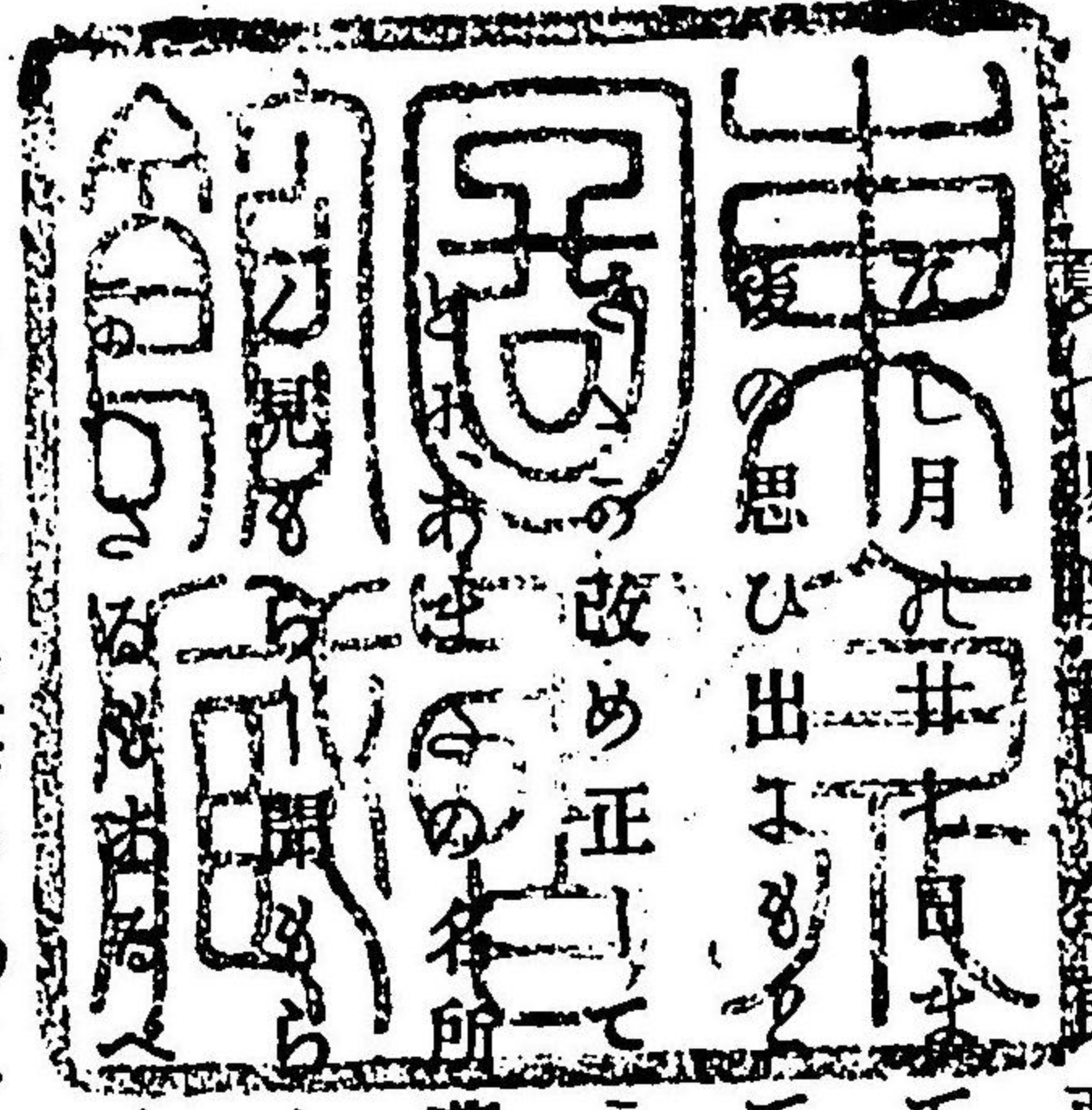
賜
暇
遊
覽

全



19-29 No 11420

賜暇遊覽附言



夏七月假中、奈良西京邊を巡覽せんとて、八月六日、東京を出立て、お
 の間、見聞えたる名所舊跡神社佛閣等此ことを、
 改め正して、おろしきとめたるを、家おのへりて後い
 ろうもの一つなりされど、日數廿日をあり、此ほ
 舊跡を見ありきることよ、あれをいと心せは、
 一なること、多あるべく、又道の次あとのおぼえ、
 いとまどけあきものあれ、わいやりてんとおも
 ふを、友人某のあわれむくつより、なるを、やめてや、とてんたいと
 あらう、いりて此稿を摺卷として古き跡など、たづね見むと、する人、
 ち、おのちあへたらん、よ、さ、いへど、よき、ま、る、へ書あるべ、として、
 せち、お求むる、い、な、と、く、て稿本をおくりぬ、く、てその道の次、



武藏の横濱より汽船よて攝津比神戸にいより、有馬ふこえ、まゝ神戸へ
 ろへりて船よて讃岐ふより、又海路をへて大阪へ行、兩三日ばありお
 て大阪を出たち、天王寺村其外あまゝの村々をへて、大和川比へりをめ
 くり龍田をこえ、法隆寺をそぎ、畝傍山にいより、それより橘寺岡寺多武
 峯初瀬等をへて奈良にいより、まゝ奈良を出て宇治へ行、宇治より六地
 藏をそぎ、伏見山をこえ、西京へ入り、まはしと、まりて所々を巡覽し御
 所を拜觀し、それより汽車よて大津にいより、湖水をめぐり水口比宿を
 そぎて鈴鹿山をこえ、關の驛より參宮道へ出て楠本、椋本、高田などを經
 山田、宇治にいよりて兩宮を拜し、立のへりて四日市へ出て、汽船へのり
 横濱へ來より、汽車よて東京へへれり、これその順路のあらまゝなり、

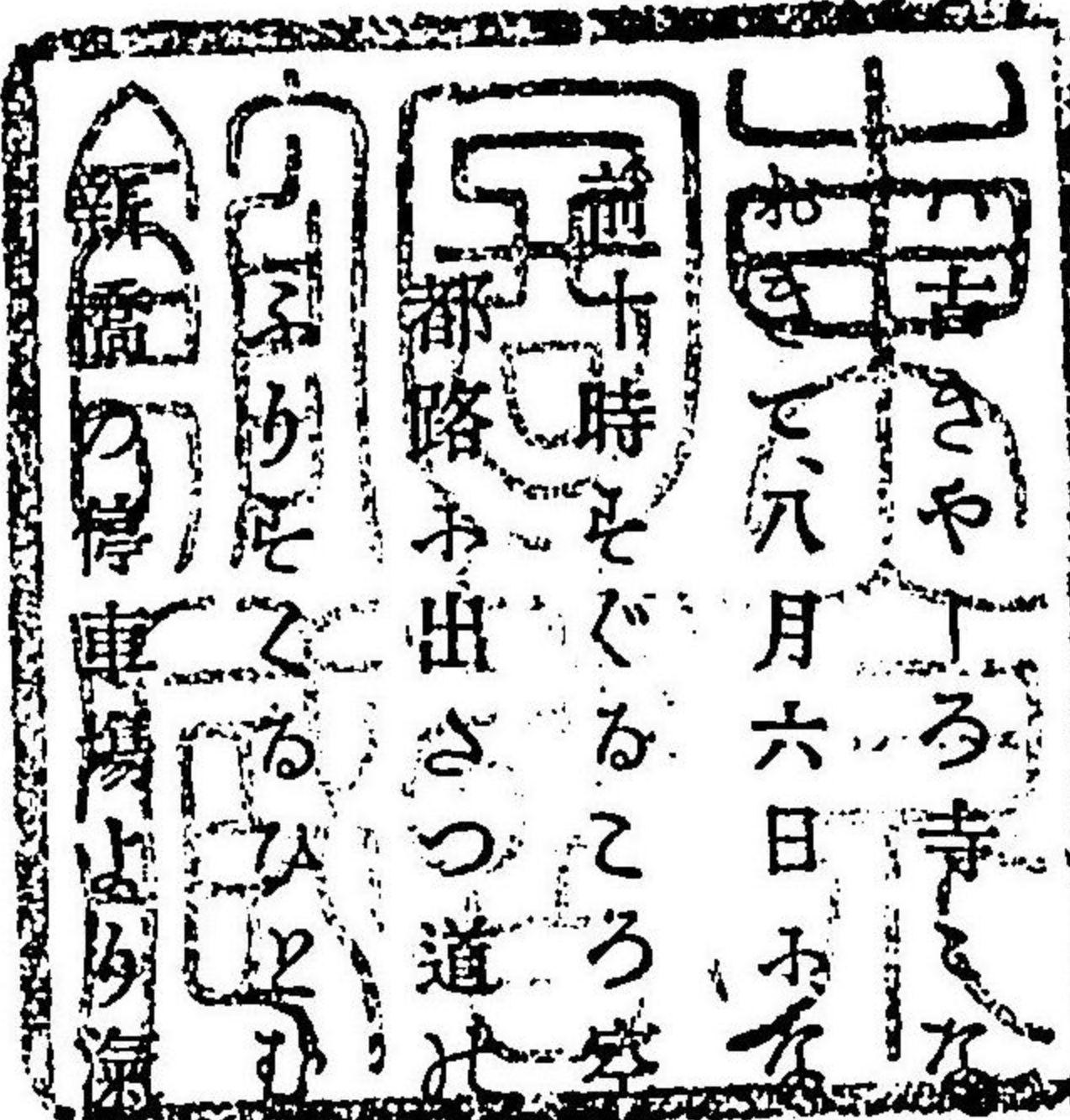
明治十八年十月

觀比やのあるし

正辭するす

賜暇遊覽

木村正辭著



こゝに此夏の賜暇中より、西京大阪奈良などのところのの名所、まゝ
 吉きやする寺などを、行て見ばやと友人小中村清矩ぬいとちぎり
 おきて八月六日おなん出つ、朝のほどよひそこ雨ふり出されど、午
 前十時とぐむころ空をたれより、

都路へ出さつ道は朝きよめふりきよめてもそくる雨のあ
 りふりそなるほどひら雨へ旅衣まゝのぬ袖の露々さ

時三十分をりり三菱の廣島丸ほうちれる、まばりて船へ出るる、
 一兩日あなゝ此風雨よて浪いまど一づまらぬて船をまぢ、夜中へ
 船れうちよてきけ、船の波をまけゆく音いとそさまじ、

大船のおもひよのめー心よもおちおぬ夜をの浪れ音のあ
まゝ小中村ぬー此よめる

うかり々ん土佐の舟路も玄のたれぬたゝひとよある波の枕よ
七日晴金をりくむら雨ふる船の内よてきくに雨の音々波の音のま
るさぞ

あーこーとおもふたのりひいやまーてまつ心なき波のうへあ
夜中そぐる頃より波そこーなきぬ甲板お出てうちなぶむるおたるの
向ひの方お火のげのきらめく、和田此岬の玄るー此火ホありなりと
きくふいとうれし

八日晴土午前二時そぞ神戸お着く常のきのふ此午後六時をりお此
所お船をつくなりといふを海にたれればかくいとまいりーなり陸
お上りて西村といふ旅亭おやとりぬ食事あどとへのさせて吞くふ

ほどお夜のあけさりよべ船中おていねかねさきおねぶさたれどあざ
りあるいとまの日數よて見るべき所のあざりなく多たれをいざとて
車やとひてうちれり出さつまづ湊川神社おまうづ社に近き頃造立ま
さるよていと新らし白木つくりなり社前の左にあらさお松此まをらお
生ひさる所おか此忠臣楠士之墓といふ碑に立てり此あさりのもとの
田畝此中なりーといふを今をいと賑わさき地といなれり湊川の西の
あさ少一のぼりたる所おありて水を溜れてなり

たけき名の世こおなれて湊川のれゆく水おならのさりたり
又小中村ぬー

湊川名よのあられてされ石のひま行水も見えぬ頃のあ

湊川の向ひの兵庫なり福原をそぐるお今の遊女屋此の街となりぬ
少一ゆけば清盛の塔あり石に十三重の塔なり小高き所おて石の玉垣

をめぐらしてあり、樹木も兩三株あるにすぎなり、又和田神社もまうづ、こゝにいよいよ和田の岬なれど、かねておもひほどの景色よみあらでほいなし、立ちへりて兵庫の築島寺へゆく、清盛の遺物數多あり、安徳天皇五歳比時の御像及び清盛の木像あり、いと古き物なり、又松王小兒の像あり、此松王といふは築島を築くをり人柱の身のたりふちなるなりとて、その縁起をなごしとのべるに、心いそぐ旅路のさまよげなりき、其外種々の什物を一室に陳列してあり、やよろしきものもと見えり、のくて神戸の諏訪山へいより、中常磐樓まで午飯をととのへて吞くふ、向ひは鑛泉の浴場あり、いと清らふえつらひより、冷浴と温浴とありて浴客も多し、長與專齋の碑建てり此鑛泉をはじめて見出さるより、あどを記るせり、常磐樓といととごのしき家およて、あつ樓上より、神戸市中を見おろし、あへり高き山まで景色よき所なり、食物の調理

もよし、えむらくして布引の瀧へ行、こゝも鑛水の温泉あり、瀧までの麓より十二三町もあり、山いとさるしめて、此ぼる瀧の山頂よりおつ、ふとそぢおおちより、これを男瀧といふ、此瀧のこゝは小高き岡よりくる故、中をより下へ眼に下へ見おろすなり、のくてもとときし、あふくされむ、山に中らへ今ひとつ瀧あり、これを女瀧といふ、こゝ上なる男瀧のおちあふれなる、ふとびこよて瀧となれるなり、左右の山高くそびえて、おちよりたる巖にうへへ、松の生ひ出さるあひだを瀧のながれ出さる、男瀧より一ほ見どころあり、あへるさ生田神社へ詣て寶物を一覽する、あさせるもの、あなりき、夕つる、諏訪山へりて南常磐樓を宿とせ、
布引瀧へて

いくそちの水は白糸くりとめて布引の瀧は名よはなれし

まゝ

岩のねなくさけておつる布引の瀧のあやさへをるるとそおもふ

小中村ぬい

布引の名おひのれつゝくる人の瀧の白糸絶そやあるらん

今宵も神戸の博聞社の支店に吉田有雄ぬいどひきて酒のそらち
夜ふくるまであらひてふいぬ

九日晴晴午前八時をり諏訪山をさち出て須磨の浦へといそぐ垂水
といふところの茶店おまをいこふこゝに樓上より海にのをみま
させば淡路島もさへお向ひお見ゆ右のうさるるう海よさへ出さる
崎も播磨なりとぞまをいやそらひて舞子に濱おゆく年ふりさる松の
もとだちねぢけてこなるあさお枝さへひろごりさるあいく本とい
ふ敷をまらぬ生いぬれり此木のげおまばいやそらふ花のもとあらぬ

といと立ちし

須磨に海士の袖吹のへそ朝風お舞子の濱に手ふり見しを

小中村ぬい

なふよりやそまの浦みもあらま書おのこみし所たつねて

此ほどの照えさたく暑さをまのむせ給ひていよ一月岡山廣島山口あ
どのあぶさしを行巡り給ひしあそへ還幸に御えらせありとて此
あさりよての大路はさよめ家この装飾りいときよらあおまつらひ
なせりあへるさ須磨に浦なる敦盛の塚お立よるいとふるき石塔なり
大路より少し入りて山の麓おあり此塔の前お蕎麥をひさぐ家あり敦
盛蕎麥といふ名は高のれを蕎麥といふあらんこよて道えるべの
人をやとふ一の谷二の谷あをを見むとてなり内裏山といふいと高
き所よて海を眼の下お見たるけていと眺望よし山のうへは皆畑なり

こゝを下りて谷をこゆるに、こと一五月ばあり霖雨ふ山水出て山崩れ道あしく其うへ高き山と山の間を行なれば、風よむをりて暑さたへぶさし、あらうじて越はつれを、左のふにいと高く聳えたる山あり、これあんのひよ鳥越なりといふ、されどさのえさのきどころとも見え、これほどの山の義経ならでもとおぼゆ、又ふさへの峯ふ熊谷の扇、松といふあり、松の數ハ七八本もあるべし、此松いつも扇の姿よて年をへて變ぜそとぞ、いふふあらん、今見るにげふ本のふさつぼとて末を左右ふ廣がりや、扇の姿しより、此谷をこえむて、少しゆけバ須磨寺なり、寺のいとあれたて、見るのげもなし、本尊の聖觀音よて海中より涌現せしなりといふ、寶物を一覽するふら此空海此作なりといふ青葉、笛もあり、又辨慶の筆なりといひ傳へたる若木、櫻の制札あり、眞譌のまらねどいと古びたるものなり、これらの物をも、ふの行在所ふさづけて

天覽ふ供ふるなりとて、唐櫃ふいれてやめて持ゆきぬ、本堂の前ふ義経腰掛の松といふあり、今の枯木なれどいと大きな木なり、源平の戦ひのをりこゝよて首實驗をしる所とぞ、若木の櫻も堂の前の石階をおりたる所ふあり、此木むらしより成木せむ、枯きてハ又根より幹を生じ、いくさびもくのごとといふ、いとうけふさきことなり、此所より見るとせむたる南のふ、行平、卿のさそらひ給ひより、時此、村雨松風此舊跡、又淡路島のよふ千鳥此とよむ、關屋此跡なぞ眺望いとよし、ゐくて車ふうち此り兵庫へのへりて、常磐樓よて午飯を食を調理いとよし、ふの伊藤參議も供奉よて此屋ふ來たるなりとて、家の内いと清らなる敷物の設けなぞよくと、のひより、まむしありて參議の着しより、吾ふどちの有馬ふ行んとて午後四時過る頃、こゝを出て車を雇ひていそふと、近き頃ひらきたりといふ山こえの新道をゆく、二人引の車な

れを猶行えぬところありて、おりて行ことえむなり、どのくそ
 るうち午後八時三十分ばあり、有馬のつきぬ、若狭屋といふ旅店
 やどる、やめて温泉へ行ふ、浴場の近き頃改め造りたるありといへ
 ど、あまり清らぬ、ぬらぬ、其うへあま、此人入こみていと雑沓せり、
 跡よて尋ねれば、別、一等湯といふありて、壹人つゝ浴をといふ、抑此
 温泉のいと上古よりあり、ものよて、遠く神代、大日貴、命のこゝ、浴
 しまひ、ことありといひ傳ふ、人皇なりて、舒明天皇、孝徳天皇な
 ど入浴し給ひ、事紀に見ゆ、それより、たゝるの、後、文祿中震災、此め、
 浴場崩れて、温泉の熱湯を變じたり、を、豊臣秀吉公これを修造せしめ
 て、舊の如くよ、な、りといふ、

十日晴月とふ、一等湯、此のふいりたる、浴場の猶清潔、ぬらぬ、
 と、他の人、此いりまじらされを、や、よ、これより宿のあるを案内よ

てつゝ、この瀧を、とんとて出づ、湯山町より十町を、りゆけば、瀧川の
 上流なり、溪路屈曲、巖石鬼として、風景絶佳なり、川をへどて、西方、
 城山童子山などいふ高嶺、突兀して相連れり、麓の瀧川の流れを巡らし、
 巖石を生ひたる矮松の形、千態萬状、いづれも奇ならざるを、あ、こ、な
 ら、此岡よ、の櫻と紅葉の古木多くありて、鬱蒼たり、春秋の眺おもひやる
 べし、こゝより少、ゆけば、つゝ、この瀧のもと、お出づ、前面の巖碧空、お聳
 え、草木生まざれり、此山を、灰形山といふ、瀧の巖のおく、ありて見えぬ、
 そのおつる音、此ときこゆ、む、この此瀑流の山谷、お響たる音、恰も鼓を
 うてる如くなり、およりて鼓の瀧の名、おおひ、を、寛文、此頃、山水、おぶ
 れて、山を崩し、風景を、變ぜしより、その音響も、失せたりとぞ、入口の巖、
 間、おきどは、やう、れものをつくりて、うち、こゝ、あり、これ、およりて、つ
 らひゆけば、瀧壺と、ゆめり、夏なれと、た、ひや、く、おなりて、いともの

とて、此所不さ、やゝなる茶店あり、を、やそらふ、歸路山道を、りゆくに、あゝへの竹むらの中よて、驚れさへつりなくことなきなり、山谷の氣候おもふべし、

有馬山うちこえくれ、夏なら聲も、く驚れなく、

薬師山れう、ろ、不、鑛泉あり、炭酸水なり、此所孝徳天皇の行宮の跡なりといふ、こゝより遠く望めむ、向ふ、有馬富士と稱する名山あり、その形富士に似ればなり、此鑛泉むらゝの毒水なりとて、近よる人もあらざり、を、明治八年大阪の司薬場、試験を乞て、はじめて炭酸水なることを知れり、とぞ、鑛泉の上、小屋を構へて、雨露を防ぐ爲、少、下、る所、一屋を造り、この内、槽を置きて、炭酸水の流き出でるものを、こゝ、注ぎ入れて、冷浴すべき設けとせり、こゝをくごりて、又のぼり、る所、湯山、神社あり、もといと、小さき社よて、麓あり、を、維新の後

こゝ、ほうつ、て宮も新造れるなりといふ、温泉寺の麓あり、行て、寶物などを観る、光明皇后弘法大師の寫經などの外、いさせるものなし、ゐて、午前十時を、有馬を立出つ、小中村ぬゝのよめる

有馬山切れとつきせぬ、くれ竹のひとよは、ありをおもひ出よ、てゐく、むらゝつ、車は、いらせも、とき、山路をつゝひて、午後二時、ぱり、神戸に歸りぬ、西村よて酒の、飯くひなど、て、を、休らふ、今宵も、當所、行在所となり、り、とて、家、こ、灯燈とも、海を、よて、煙火うち、あげ、種、この作り物など、まつらひ、りといへ、を、行て、んとて、あゝこ、あゝさまよひあり、くに、いづこも人多く、うちむれて、いとよぎ、いゝ、あゝ、くて、午後十一時は、あり、なん三、菱の六甲丸、うち、れる、讀岐へ、らんとて、なり、十二時過る、ころ、船出、を、船より、海邊を見、せ、せ、御座、船、其、外の御用船とも、いくらともなく、岸、つなぎと、め、る、いづれも、そ

の船のちふとも一火をよそほひてたてつらねる海のおもての
晝よりもあらくそのたしきいたんるさし、

つらまれる磯へ此船の船あり君々ひるりをそふるよは哉

此あり此とゆるるさざり船窓より見おくりて、今もとて船中ひりて
うち寐ぬ浪いとまづらふて船をゆれぬ、

十一日晴暁夜あけさればおきぬ船中よてきけバ今瀬戸浦なりといふ、
甲板へ出てなぶむるお、左右ともおいくらともなき巖の岸へそひてた
ちるけしき、えもいたむめてさし、小豆島も右のさお、家島エシマの左に
さおとゆ、多くの島をへて、十時ばかり讃岐の多度津おつきぬ、高見屋
といふ茶店よて午飯を食し、こより車よてゆく、午後三時過る頃琴平
の町へいよりとら屋といふ旅店へやとる、市中へ田舎よしてひよき町
なり、高松よりゆくと九龜よりと又多度津より行との三道ありて、いづ

れも町の入口へ石に鳥居あり、町の中央へ流れあり、これおとせせる橋
をさや橋といふ、橋へ屋を架しより、琴平の神社の主典松岡調ぬシツキを訪
らひるお、やぶて案内をして本宮へつれゆく、市中より此ぼること七
八町ばかりもやあらん、先頃の霖雨よて山くづれて本宮へまうづる道
損じよりとて、本道をもほることとめて、下山サマの道よりゆきよとる
よくなるを、松岡ぬ、此案内なるおよりて、閉ちるところをひらきて
本道よりのぼる、お中ほどおくづれる所ありて、大小の古木多く倒
れて谷間へおち重なれり、いく百とせを経よりなんとおぼゆる樹木の
かく倒れぬ、さるいとあさらし、此所くづれさし、ほとり、深山幽谷の
ありさま、常お目なれてごおいとおそろしくおもひより、今もあく
うちたるけさるさはとひなれり、松岡ぬ、さるれり、本宮へ近き頃繕
ひよりとて、いと莊麗なり、さるへの廓へつゞきさる所へ、后神三保津姫

の神の社あり、このもとの観音堂を造りおへるなりといふ、あくて松岡ぬー此宅よりへりたるよ、何くれとあるじまうけして、酒肴などそむるを、強ていとまをつげ夜よ入されと官司の深見速雄ぬーをとふ、こゝよても酒肴など出してもてなされり、されと明日も大阪のあへものせんとおもふお、旅のいそぎもあれむとて、宿おへりぬ、
 十二日晴水曜午前九時登山して神宮教會所へゆく、深見速雄松岡調の雨氏こゝよて待おへり、教會所の本宮より少し下りたる所へあり、昔の本寺なりとぞ、其結構いふばありなし、壁のたけつけ襖の畫はいづれも藤原、若仲應舉等のあたるなり、そのうち表書院上段の間の大瀧の圖、同じ書院の入口の間の遊虎の圖、ともふ墨畫よして應舉の筆、奥書院の上段の間は壁むりの極彩色、此百花圖よて若仲の筆、いづれも殊勝たるものなり、其外屏風數隻あり、西湖八景は圖の雪舟、山水の圖は探幽は筆よて

ともふ墨畫なり、源氏物語の圖は土佐光信よて極彩色、山月の筆の群馬は圖の淡彩色よて、筆意絶妙なり、又探幽の普現菩薩は像、金岡の不動尊の掛物あり、又智證大師の不動尊は畫の背丸き輪をおひ、輪の外は火焰あり、尋常の圖と異なり、兆殿司の羅漢の畫もあり、又劔類いと多し、其うち天國行平ことお目とまりぬ、崇徳天皇御物よてありといふ、金銀の鏝あり、金は桐形、銀は菊形なり、たてお當社第一の秘物なりとて、崇徳天皇御宸筆の六字の名號を拜見せしめり、其運筆甚奇よして且見事なり、

高野 深 徳

あぐのことく二字つゝを合せてかゝせ給へり、これらの物のもと、白
 峯寺あり、近きころ本宮へ移せるなりといふ、なほ深見松岡
 の兩氏より酒肴などいゝて、あるじまうけせられ、きど、かねての日
 どりもあれを、強ていとまをつげて、ち出ぬ、午後二時ばり、多度津
 かいより、三菱の大陽丸のる、海を和よていとよ、丸龜高松等の海を
 うち過ぎ、たるふ家島五郎山を右に見、播磨灘をこる、こよひ舟中
 小臥ぞ、

十三日晴木々ふも猶船中なり、夜明けて甲板よりなほむれを、淡路島一、
 谷等の浦と見ゆ、神戸の海をへて大阪ふつきさる、午前九時をりな
 り、陸おぼりて備後町の博聞社の支店ふゆく、かねて社長長尾景彌ぬ
 一より此知らせもあれとて、その代理人森岡榮いとねんごろおもて
 なされて、やぶて築地の竹式樓、案内されば、こゝを宿とて、午後五時

より中の島なる豊國社又天満宮を拜し、造幣局前をそぎ、川崎橋の出
 水のをり橋落されば、舟よて向へり、京橋口より入りて舊の大城の
 うちを一覽し、夕ぐれちやく竹式おへりぬ、

十四日晴金朝とく博聞社の支店より、入るべの人おこせられ、午前七
 時竹式を出て住吉のへも、のせんとて、道そのら高津明神生國魂、神
 社等を拜と、此所いと高き岡よて、大阪の市中の半を見り、少
 しゆけ、清水の観音堂あり、京の清水をうつり、とるところよて、の三
 筋の瀧もあり、いと細し、此寺のうしろをおりて、一心寺といふ寺、い
 る、小高き所なり、本多忠勝の墓あり、此寺のへなる岡山を茶白山と
 いふ、仁徳天皇、紀の荒陵といへる、是なりといふ、それより四天王寺お
 いさる、大伽藍なり、の龜井の水のさのと清けよも、えと、こよて小
 中村ぬ、これよめる

萬代もあられてたえぬとけりとの龜井の清水むとひてそゝる
 鐘樓堂よ此頃舊曆の盆なりとて善男善女相集りて鐘供養をいとな
 とをり徒然草も此鐘をほめて黄鐘調のもあるなりといへり但しむる
 一の炎上して今此の後も鑄るありといへどその音他鐘も異なり
 ていとさやくなりそれもなき父母娘等のさめよとて錢を賽して冥福
 を祈る當寺の聖徳太子の御創立にしてその後まむし火災おこり
 て今此伽藍の元和年中の造營なりかくて住吉さまお車はしらとほど
 おく天下茶屋おいらたればまばしやそらひて舊跡を一覽といと古
 びる家なり豊太閤の休憩所なりといふ所もいとあれたてふりこゝ
 を出て住吉おまうづ宮の四社ありて前の二社の左右お相並び奥なる
 の前後も序でふり宮のつくりざまも他の社とおもむきことなり船
 路のつゝぶなるりーことを申してぬさうてまつる

まゝもこむことゝなれは住のえのきーおありてふ貝のひろたじ
 堺の妙國寺お行て蘇鐵をくるおもひーよりの小さくてほいなし舊_下此
 の織田の君おきりてとられて今あるのそのもとより生ひ出るなり
 といふ寺も小さくて見どころなしこゝを出て大渡戸といふ海邊おい
 なる海水の浴室あり風呂此造りさまいとよし家の名は丸萬樓といふ
 こゝおて午餐をとゝのへさせ樓上おて海の面うちなぶめつゝ酒くと
 うたし暑さもうちをさるゝむりなるをさのえいとて車引出させう
 ちのりて歸へるさ今宮千日前等をへて兩本願寺を一覽と東の殊お莊
 麗なり堂の前お大きな菩提樹ありていとよく繁茂せり午後五時竹
 式おひへる

十五日晴_土午前七時竹式樓を立出つ奈良おらへゆむとてなりま
 づ天王寺村をへて平野の町をそぎ河内國に出て澁川郡なる太子堂村

をよぎる、道の側田畝の中に、物部守屋大連公之墓に九字を彫る碑建
てり、そのむろ大連の首を埋藏せし所なりとて明治三年、本郷縣の知
事某の建ふるなりといふ、此あり、本郷部弓削などといふ村ともあり、
くて國分といふる、此ほとり、大和川の川べり、さきつ頃の出水よ
てこゝろ、こ崩れ、そこね、こゝよて中食して、藤井村といふり、大和
川を、こゝりて立野といふ、國分よりこゝまで二里餘なり、立野よ、こ
る橋も落され、舟、こゝる、立野の本社といふ、高き山の上にあり、近
き頃造營あり、こゝとて、こゝと新ら、境内、廣ら、宮、本郷部、なり、
此龍田川、此山のうろよあり、と土人、いへ、と、こゝら、龍田川、こ
ゝより東へ下り、勢野村といふをへて、神南備の三室の山を右、見て、ゆ
け、川あり、これ、土橋を、こゝせり、これ古へ、龍田川、此流れなり、と六
人部、是香、此説なり、まゝる、よ、豊前中津、此、人渡邊、春重、六、人部、此説を、非

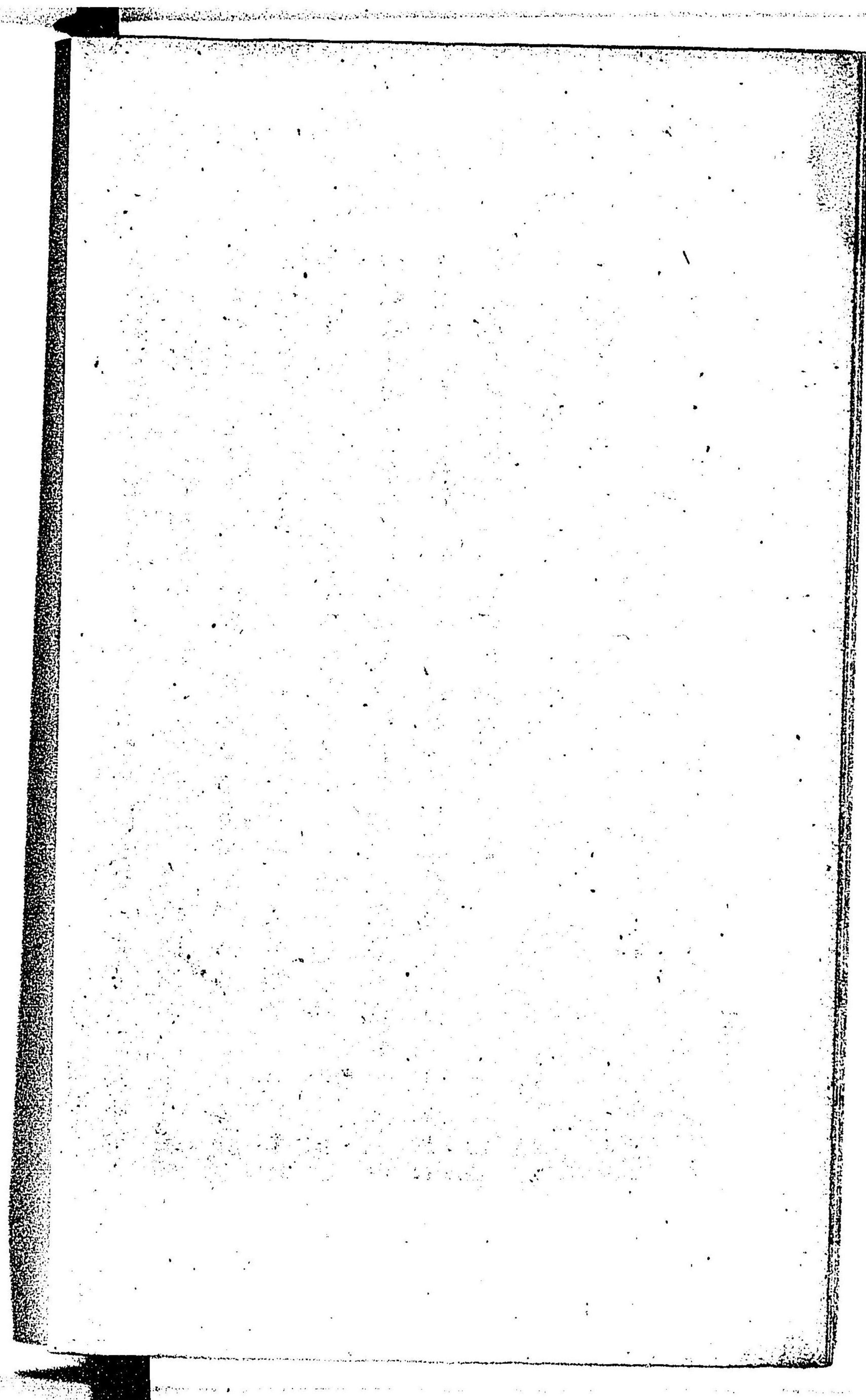
なりと、勢野村、此、東なる小流、古名、平群川、よ、こゝて、古へ、龍田川、今
の大和川の下流よて、神南村のあり、より川下なる藤井村の邊まで、の
稱なり、といへり、猶よく考ふべきことなり、此邊河の兩岸、楓樹多し、古
木もあり、されど、此、寛政、こゝ裁ふるものよて、古へ、此、よ、あらざと
いふ、

何を、こゝもぬ、さよ、手向む、神山の紅葉、こゝ、色よ、出ね、え

三室山の麓、此里を、神南村といふ、此村より南よ、ゆけ、大和河に出づ、此
河、初瀬より南、大和の國中、此、諸流、皆、此、落ち、き、こゝりて、河内の國府よ
出て、石河川と、一よ、ありて、堺の北を経て、海に出といふ、信貴山、勢野村
より西北の、こゝ、三十町餘、あり、此山の上よ、松永、彈正の城跡あり、とい
ふ、道を、いそげ、バ、え、ゆ、こゝ、の土橋を、こゝりて、少し、行て、又の、ぼれ、龍
田町なり、俗よ、龍田、社と、こゝなへ、來、こゝ、此市街の側よ、あり、今、立野

の社は攝社とあれり、これより法隆寺よりゆき、まづ勅額門より入り禮堂の中間をとほる、此の鷗の宮は跡なりとぞ、此奥なる殿を夢殿といふ、八角造りなり、太子の童像を安置と、此殿は推古天皇九年二月御建立より、其をりのまゝよて明治十八年まで一千二百八十五年を経るも、此なり、それより舍利殿を拜と、これを繪殿ともいふ、此素、致實の筆なりといふ、太子の畫傳を舊も此壁に貼りありなり、こゝまでをとりとて總名東院といふ、それより本院よりゆき、まづ四足門を通り中門に入る、此兩側より坊中ありなりなるべし、今の皆こぼちて表の土屏と門のと残り、御鏡、池の廣からず、此所の茶店よてまばし息む、此池のうへは大乘木と唱ふる楠の古木あり、いと朽ちたり、五重塔の内より入りて觀るよ、四面の巖窟のうちには佛像を安置と、皆土造なり、又小さき土造の佛像多くあり、此塔は徳川四代將軍のとき修補またりといふ、げも扉ま

ゝの瓦などよことく、く葵の紋をつけたり、それより二王門にいされむ、南大門のむるむ向ふふとえたり、立のへりて大講堂にいたり、廻廊を出て峯、藥師を下より拜と、北の方よりありていさゝか高き所なり、眺望よろしといへど、くさびれをきべえのぼらぬ、かくて事務所へ乞ひて金堂を扉らせ、内へ入りてこれありとある佛像はいづれも千有餘年の古物より、稀世の物にとなり、これ推古天皇のとき止利佛師の造りたりといふ、釋迦佛像、たむじをり造れる藥師佛像及び二天像も皆此内へ安置と、其藥師佛及び二天像光燄、銘は左に如し、



池邊大宮治天下天皇大御身博賜時歲
涉兩千年茲從夫天皇與太子誓願賜我大
御病大平欲成故將造寺樂師像從往奉獻
當時崩賜造不堪者不滋田大宮治天下天皇
自王及東宮聖王夫命受賜而歲茲丁卯年往奉

上言大口費上牙而談
未開二天作也

藥師德保上而
鐵師利古天作也

按、池邊大宮治天下天皇の用名天皇よて、丙午の其元年なり、小治田大宮治天下大王天皇の推古天皇よて、丁卯の其十五年なり、又太子及び東宮聖王との厩戸皇子を申となり、○狩谷望之云、孝德天皇白雉元年、紀云、是歲漢山口直大口奉詔刻千佛像、是像豈非所謂千佛之一耶、上猶言首領也、

まゝに此名おきこえたる高麗の曇徴の壁書は佛書も此堂の壁おありなり、四方は壁お直よ書きたるものよて、その奇怪なること言語お絶えたり、いっよてゆるる直立なる壁上お筆を運らんとおもへばいと、あやし、その畫は藥師經の説相と阿彌陀經の説相なりといふされど年久しくへされば剥落してさうならぬ所多し、今よて修補を加へ、それを全體磨滅せしめ、さき我國の駐劄英國公使館の書記官より上サト一氏の明治十三年お當寺よいよりて此壁の佛書を看て、萬

國無二の奇物なりとていふく賞讃して、公お請ひ奉まりて、摸寫の事を山城、國葛野郡花園村おとめる佛畫師櫻井香雲翁おあつらへてうつさめめよりの三月より其事をはじめよりとて、堂の内お足代を組てあり、此の今少よりよく見るべかりを、案内お法師のいとそばくく、其うへ堂内ま暗をれを心お見ることをぞえさり、是遺憾なりき、それより廣瀬神社おいる、此社の此ほど造營なりいととえて、いと新らく、惣朱ぬりよて、小さなれと美麗なり、森のや、廣くて樹木もよく茂れり、四面の皆田畑なり、三里おまりゆけば今井といふ所なり、こより畝傍山の麓なる山本村のほど遠うらな、此道の行手お左のうへお綏靖天皇の御陵あり、日くれをばたく、よ行をきぬ、それより山本村おいよりて辻本喜三郎といふいらなる旅店のあるよやとれり、食物

又の夜のものなどいくおあらんとおもひをつらひ、おあるじは夫婦いとまめ人よていとよくもてなされ、且おもひよのまさりてものもやよよりき、

うへ原のひしりお宮の跡とへうねひの山お松風のふく
おもひきや京路うけて玉たをきうねひの山お旅寐せんとい
小中村ぬい

おき出て朝めよく見む玉をそきうねひ山をやのものよて
十六日晴朝まごき起いで、樓上より見るせば、畝傍山の西南のうへおいとも近く聳えて、山の尾いと長く左右お引をへ、並ぶてる松の生えぐりるさまのうら人の讚めをやいよりなんもぞおぼゆる、耳梨山も東北のうへおをるう向ひお見えり、いと丸き山なり、俗お天神山といふ、天の香久山の東のうへおありて、おまり高うらぬ山な

り、古書ども此三山の事のわれこれと云ふるもつきて、常不見まほしうおもひよりいを、こゝびまのあふりくることを得ていとうれし、此香久山北のわふあつた埴安堤のあまゝあるへ東へ古へは藤原宮の跡なり、この萬葉集なる藤原宮、役民の歌此事をおもひ出して、

家とそれ身もなまらそつくりせん御門の跡をこれのあゝもそべてこゝは地勢を見るも、四方ようちつゞきさる山をも多かるものら、此あふりいといと平原の地よして、獨りごちさる山も此三山以外の見えぬ、さといへいと廣き庭中も、さざと造り立さる假山に如し、これよりて古人の殊に此山を愛賞するもこそあらめ、うくて午前七時辻本を立出づ、まづ神武天皇の御陵を拜と、畝傍山の東北へあり、四方へ石の玉垣をめぐらそ、東西九十七間南北百廿二間ありといふ、表門を入り右の方へ中門あり、こゝよて拜をとり、此中門の内へ堀を廻らせり、御陵へ

此内へあるなり、近き頃までハ田畝の中へありて小さな塚よてありといふ、此あふりは字を神武田といふ、貝原益軒の大和めぐりも、畝傍山の今井八木の南道の四五町西へあり、里人の持明寺山といふ、山の巽ほうねひ村榎原村あり、神武帝の榎原は都の地の此邊なり、一説ハ山の東大久保と云所榎原の都のあとなりといへりともあり、安寧天皇の御蔭井、上は陵へ畝傍は西南の麓へあり、こゝより少しおひゆけば、民屋の間へ御蔭井あり、近き頃までハ民間の飲用水ありといふ、今の石造よして上へ蓋をおほひより、これ古の御蔭井なりやいふもあらん、あは金比羅よて松岡調ぬしはいひい、古の井は今少し山の根近き所へありなるべし、但し此あふりより畝傍山を望めば、山の尾いとあふく左右へ引えへて、人體の股の如し、其ほどりへありし井なるをもて、御蔭の名へおひしならんといへり、此説よりありげなり、懿徳天皇の織沙谷の陵へ畝

傍山の南に麓あり、宣化天皇の身狭桃花鳥坂上の陵に向ひのゝの
 田畝中あり、こゝよりふいおむ、此所より東のゝお向ひて山づ
 らひゆけ、益田堤の末となり、遙向ふに石船、峯とゆ、峯のうへ船
 の形、さる大なる巖ありといへど行てもとぞ、これ空海の益田池の
 碑の臺石よとて造るるべしこれれるなりとぞ、池の跡も今のそべて田
 畑となれり、おれ女の物洗ひおるを見て、通を失ひさりとていふ仙人の
 建る久米寺の、本堂も小さく仙人の像を安置したる堂もいと小さく
 ておれえてさてり、古き佛像もこれおれありて堂内おつらねおきさる
 を此ほとり佛像をぬそむ賊おほれを、別お方丈お藏めおたりとて堂内
 より何もあらず、欽明天皇の檢隈坂合の陵の、高き山をたぼりて又くさ
 りさるところあり、柵のうち堀をめぐらし、うしろの直お畑おつと
 たり、御陵の傍おさやうなる柵を結ひめぐらしさる所あり、おれ好古

日録お載せさる異形の石像の此内おおたりといふ、

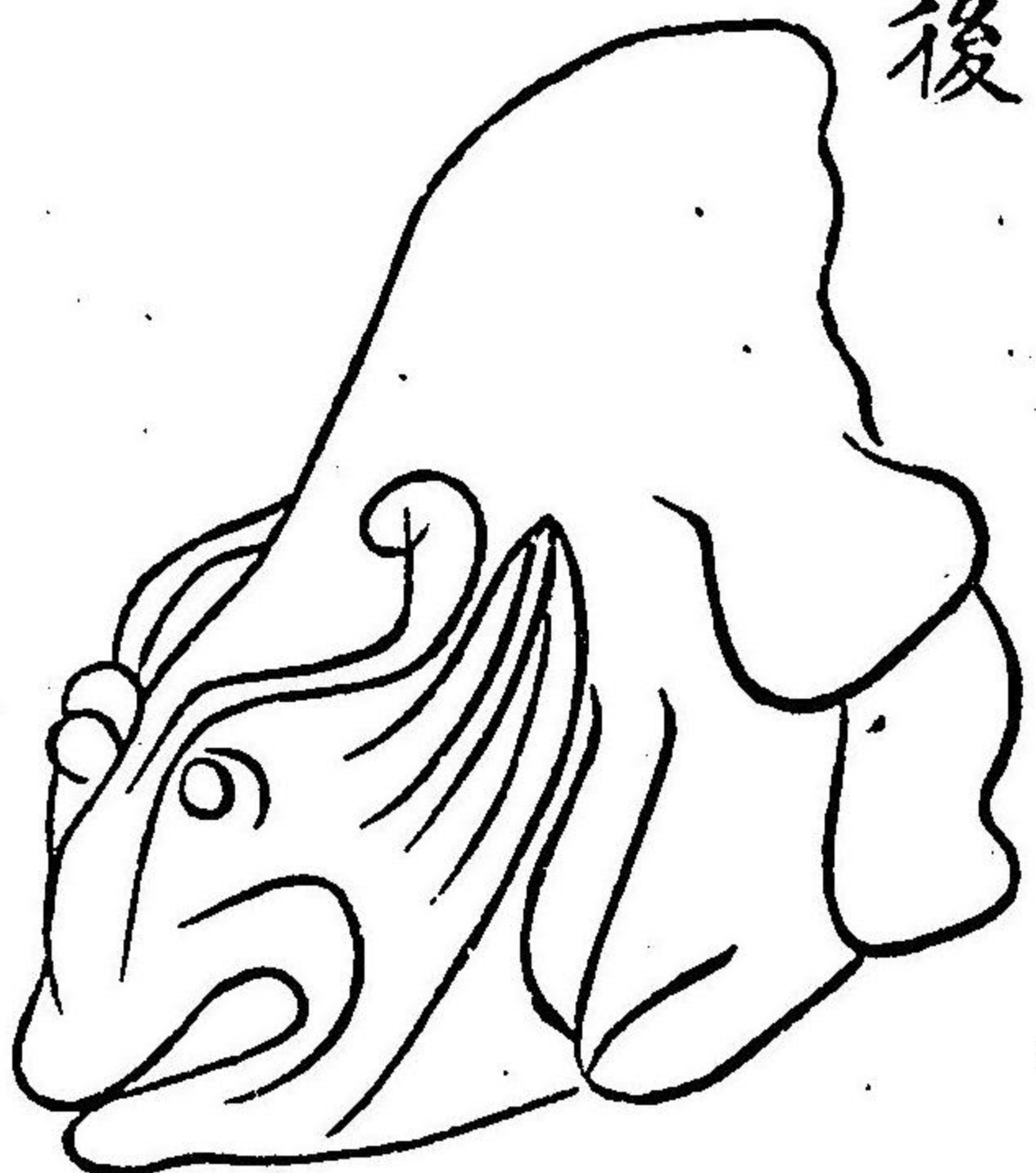
日録お云往年欽明帝御陵比邊より石人四軀を掘出そ一の一石三面
 一の一石四面一の一石三面一の一石二面後土人此を陵上よ列そ○
 今此内の二石の像を謄寫して此お出そ

一石三面

前

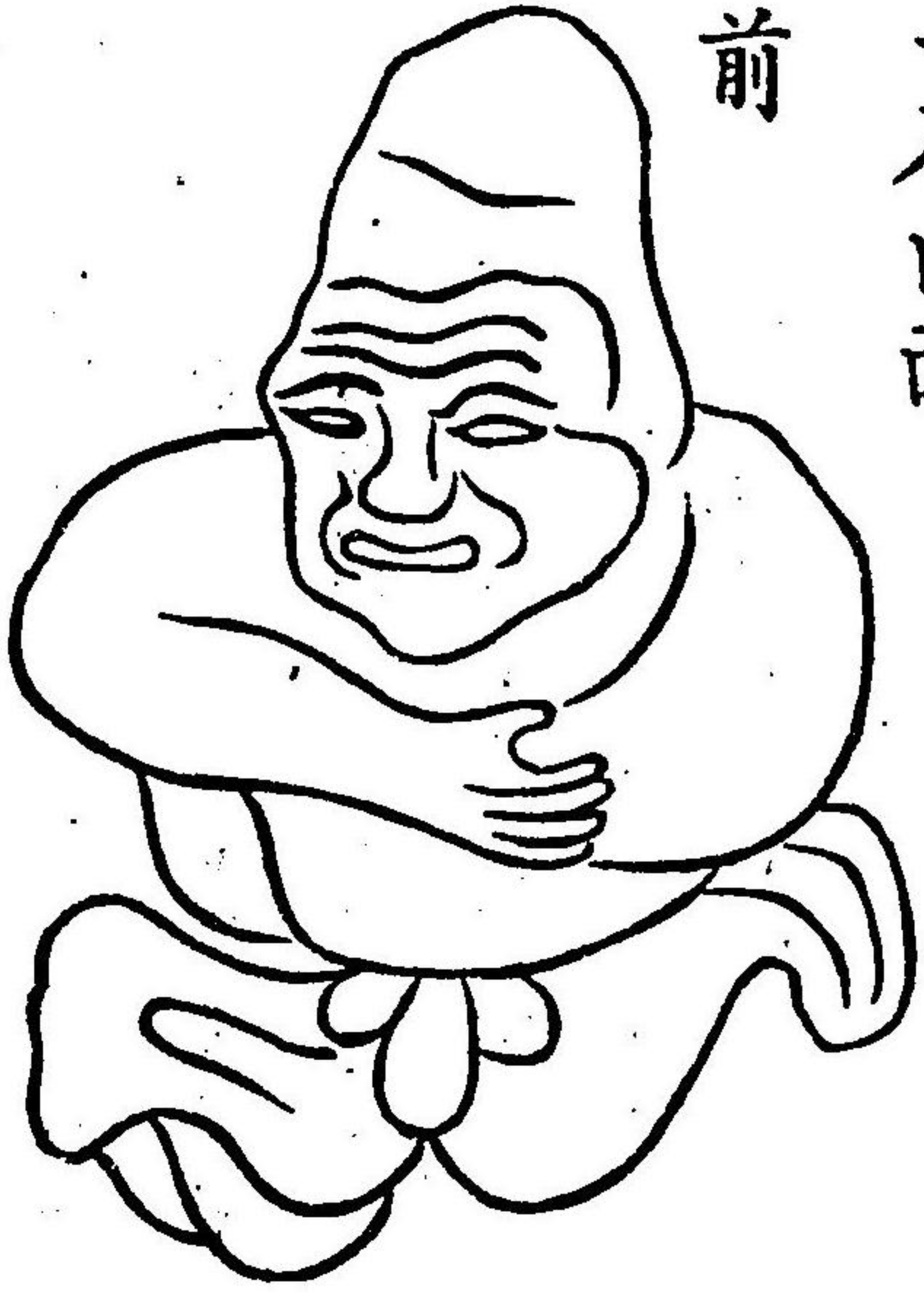


後

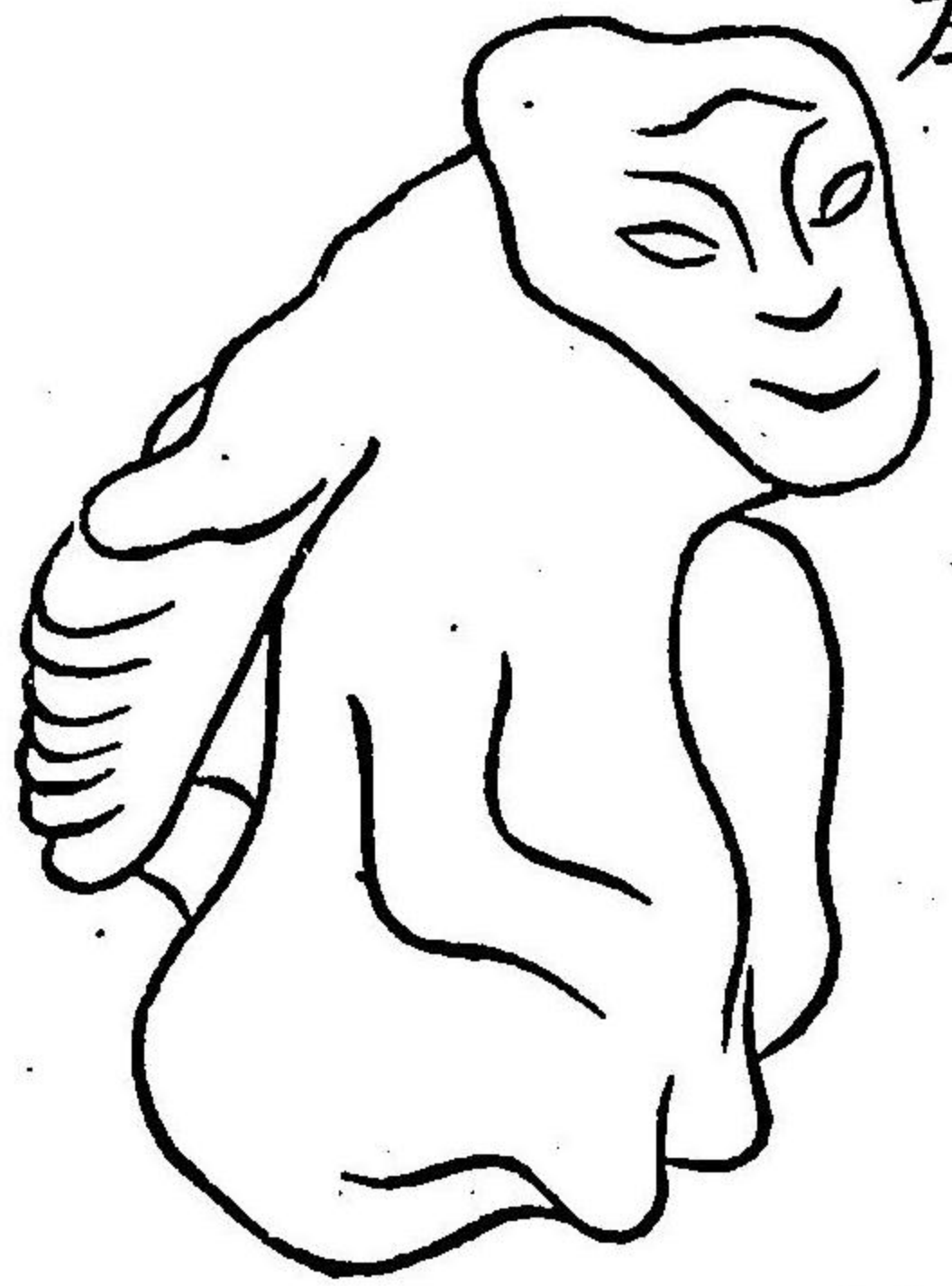


一石四面

前



左

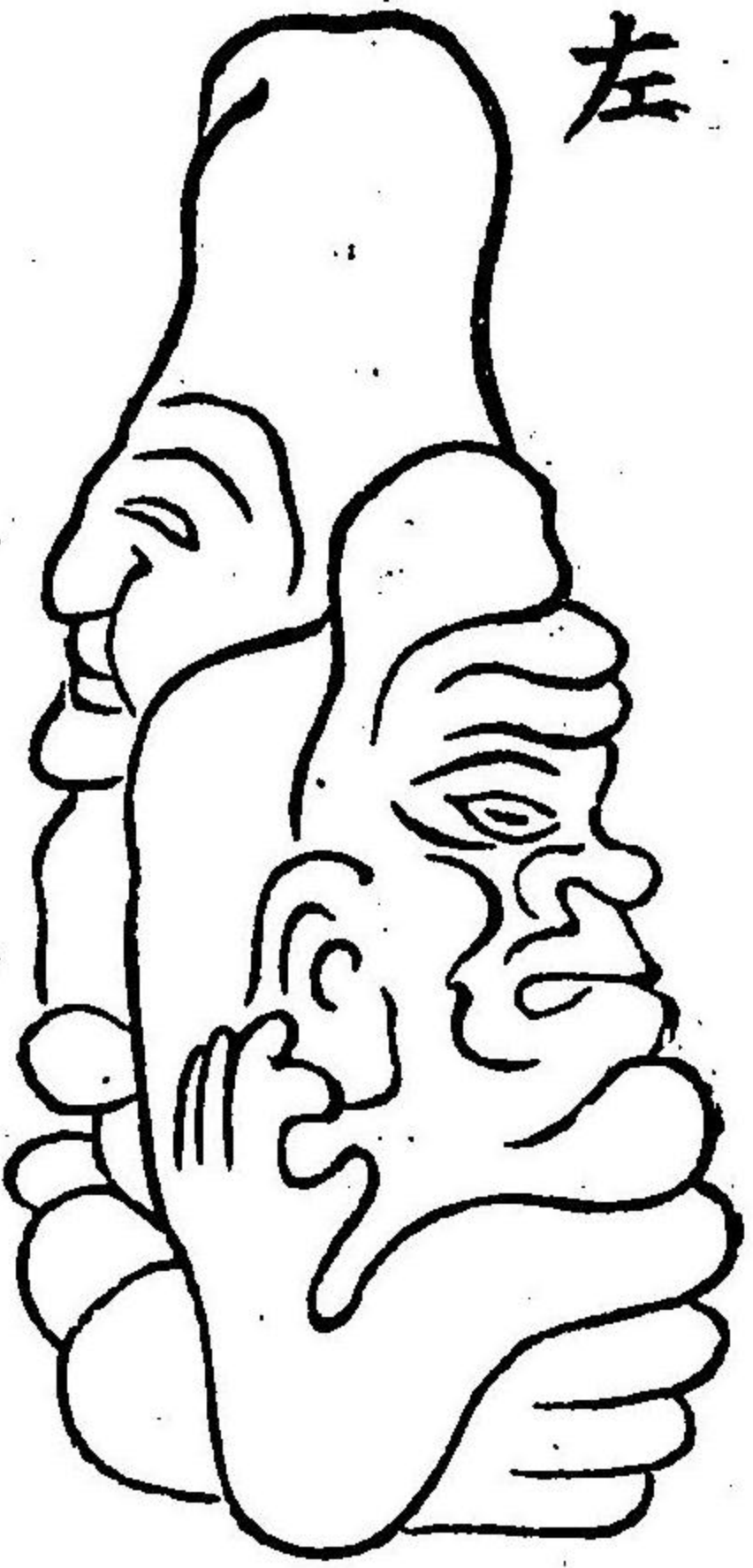


後右



三十四

左



後左



天武持統兩天皇合葬の檢限大内の陵を拜と天皇の御陵のいつこなる
もいとおごその木柵結ひ回らし、陵守の日ごとく掃き清めなどそれむ
塵ひとつともあらぬいとそがくむらこの御陵をおばきて、物など
ぬそととりふりためしもあり、何事もとぞれ世ばかりあさましきも
ののあらぬ、橘寺ふ詣つ、聖徳太子の勝鬘經を講ぜられし所なり、此所そ

三十五

あちち太子御降誕の地なりといふ、西門の白田の中、左近、櫻、右近、橘と
 える、さる小木ふ、本あか、も推古天皇の植させ給ひ、なりといへ
 と、現存の木いと小、堂守、とへ、此木根、往古のま、よて、幹、大
 きくなら、て枯れ、又本より生出ること、いつも此の如、といふ、此
 須磨寺の櫻とおなじ、な、あり、いとを、堂、小、さ、く、て、鹿、なり、此
 寺の傍、佛頭山と稱、る山あり、あまり大きな山、の、あら、此、他、墨
 染櫻あり、これも木、小、さ、く、太子硯の墨を、け、給、ひ、より、花の色、墨
 色を、帯、び、て、咲、き、る、今、な、なり、といへり、又、橋形の燈籠といふ、あ
 り、春日燈籠、よ、似、て、少、異形なり、これ本朝、よ、て、燈籠を、造、る、始、め、な
 り、といふ、又、刈字の池といふ、あり、刈字の形を、な、れ、ば、なり、と、これら
 皆、堂守、に、居、る、所、の、庭、前、に、あり、池、も、いと、小、さ、く、燈籠も、さ、ま、で、の、もの、と
 いふ、え、び、あまり、こと、く、いふ、を、の、き、ま、る、お、く、なり、こ、

より、欽明天皇の御陵、十二町、神武天皇の御陵、一里、岡寺へ八町、飛鳥、社
 へ八町、多武峯へ五十町ありといふ、岡町、い、さ、る、東の、あ、七、八、町、の
 ぼり、て、岡寺あり、これ龍蓋寺なり、天智天皇の御願、よ、て、義淵僧正、に、開
 基、なり、寶物を、一、覽、し、れ、と、今、の、記、慮、せ、び、隨、分、め、づ、ら、き、物、も、あり、
 る、や、う、お、お、ぼ、え、さ、り、本堂の左の方、いと古、び、さ、る、小、樓、あり、樓、上、に、古
 き、佛、像、あ、ま、お、お、り、樓、の、む、ろ、に、宮、門、の、片、を、れ、なり、といふ、此、所、を、舒
 明天皇の岡本の宮、に、跡、よ、て、齊明天皇も、こ、よ、お、お、り、ま、る、なる、べ
 く、天武天皇、に、清見原の宮も、この、ち、の、き、ま、る、なる、べ、れ、を、さ、も、あ、る
 べ、岡寺より五十町、あまり、行、て、多武峯、に、麓、い、さ、る、こ、よ、て、駕籠を
 雇、ひ、て、山、に、お、お、り、い、と、け、を、き、坂、路、よ、て、も、と、り、を、づ、て、駕籠より
 ま、ろ、び、落、さ、れ、ら、ん、よ、い、と、お、も、ふ、い、と、お、そ、ろ、し、に、ぼ、り、を、つ、れ、
 山の、い、さ、き、に、茶、店、あり、此、お、ら、楓、樹、多、く、こ、よ、り、そ、こ、く、ご、り、て

神殿はいさる、今ハウーろ此のよりのぼりさるなり、櫻門を東西より
 西櫻門を入れ、左の方ハ神殿ありて南向なり、週圍ハ廊をめぐら
 して、いと美麗なり、又神殿のウーろハ櫻多くあり、前の坂の左此方
 ハ古木の楓樹多く茂れり、春秋のなごめおもひやるべし、今も夏なれば
 へても櫻もひとつ色ハ青とまふりていと涼し、夏もよき所ありたり、
 右の方の廻廊ハ寶物を陳列せ、主典山田耕作ぬーハ小中村ぬーの知り
 人よて、寶物の陳列場ハいさなひ行さるハより、いづれも手ハとりて拜
 觀と、横笛ハいとめづらきハあり、又粟原寺の鑪盤ハこハありて親
 しく見る事をえさり、和銅八年の銘文ハおのれも摺本を藏し、これと、今
 現物を觀るハ、其文字の鮮明銅色の古雅なる、眞ハ稀世の珍なり、當社の
 縁起二卷あり、極采色よていとうるむし、畫ハ狩野光信書ハ一條禪閣な
 りといふ、畫ハよ、光信時代の風俗をもてゐるものよて、古を考ふる

助けハならぬ、又小野、篁の筆なりといふ、大織冠の靈像あり、いと古色
 なり、神殿の前ハ十三重の塔あり、定惠和尚歸朝のとき鎌足公唐土の五
 臺山より持歸り、なりとぞ、そののさへハ菴羅樹といふ木あり、これも
 唐土より持歸り、なりといふ、こハを下りて一里あり、ゆけハ櫻井、驛
 なり、又一里行ハ追分なり、又一里行きて初瀬ハいさる、町並いとよし、又
 よき旅店もあり、町を横をれて少し昇る所ハ二王門あり、これより
 三町ばり石階を昇れば、本堂なり、二王門より本堂まで石階の上ハ三
 曲の廻廊あり、初北へ登り、轉じて東へ登り、又北へ登るなり、但し近き頃
 二王門及び廻廊の半ハ焼失して、今修繕中なり、堂ハいと高き所あ
 り、れども舞臺の前いと狭く、樹木茂りて眺望よらぬ、廻廊の半より下
 を見おろせば、景色いとよし、むらより花の名所よて、今も本堂の前後
 櫻多し、小中村ぬーハよめる

初瀬山いそのぬ道のほどあらハ花なきおくもまたてみまゝを
 ろくて追分よ立るへり一里ばありゆけば三輪なり此行手の左の方よ
 ろ此三山ハゆるなり三輪神社の二股杉ハ山の麓あり今ハ枯れて
 二つよ切りて道の左右よ倒してありいと大きな杉なり神代の遺物
 とおもへばいとゆるくて朽るるところを一片へぎとりて持るへり
 ぬ衣掛の杉ハ社の前よありこれも枯れて其まゝ樹より本よ小さき杉
 を植そへり時よ午後五時過なりこゝより奈良までハ五里ありとい
 ふ日くるともなふハ奈良までゆるむとて車はしらと箸の陵大和神社
 石上神社など此道の左右よあり往來より拜と例の道をいそぐよより
 てありのくて午後八時ばありハ奈良よハつきぬのねて奈良よてハ三
 笠山の下なる武藏野といふ茶店よ宿そべくおもひおきてこゝりもい
 ろハせん夜よ入るるうへ土地の摸様もあらされハ猿澤の池の邊

なるうをやといふ旅店よ宿りぬ樓上より臨めハ沼の向ひハ公園地な
 りとてなふハ一日曜日よて遊びありく人も多くもの賣ひさぐ家な
 ど多く出ていと賑ハハされとくさびれさきハ行とむともおもたぬ
 うちふいぬ

十七日晴月午前七時よ宿をいてさる澤の池ハ堤をめぐり少くはば
 りて大路よ出づ左の方岡ハ上なる堂宇ハ興福寺なり此寺ハ元明天皇
 和銅三年よ淡海公ハ創立せしものよて日本第一の大伽藍なりとい
 へど今ハ焼失して南圓堂と五重塔東金堂ハあり東金堂の前よいと
 年ふりさる松ありめづらき古木なり此寺ハ嘉曆二年までハ凡八度
 炎上そといへり少くゆけば春日ハ一の鳥居なりこれを入りて馬出橋
 をとされハ右よ鷺原といふ所ありこゝよ小さき池ありこれ古歌よよ
 める野守の鏡なりといふ例のいさあらん雪消の澤といふ所も此近

きほとりなりといふ、此あり左右松杉の林よて、鹿多くむれおあり、これ春日野なり、明神の社の此奥ありて、二社鳥居よりおくの左右とへていくらともなき石燈籠あり、所謂春日形の燈籠多し、社のいと莊麗なり、前より拜それバ一社の如くなれど、うしろまはりこれの四社なり、廻廊よの青銅カネの釣燈籠數百あり、こゝを出て山ごよゆけの三笠山の麓よいさるいと佳景なり、山の芝生よて木はなし、あまり大きあらぬ松少しとてり、おなじ形なる山三つ重なりてあるお故よとさ山といふなりといへれとこの俗稱よて本名の若草山なりまことの三笠山の春日山此一名よてこゝよのあらむ、此麓を行めぐりて手向山の若宮八幡を拜と、東大寺の鎮守なり、これより東大寺の境内よ出て大佛殿よ至る、殿中博覽會ありて常備品を陳列と、東大寺春日社及諸社諸寺の寶物をあつめて縦覽お備へあり、今皆忘れあり、大塔宮の隠れ給ひし唐櫃なりと

いふおありきめつらきものなり、摸造なりといへといとよく造りて、ととよの眞譌とさふあり、二月堂三月堂四月堂あり、二月堂の東大寺の東北の方少し高きところあり、寶忠ヒツチノチカ和尚の創立なり、毎年二月一日より修法と故に二月堂といふ、はるの西お膽駒の嶽見えて景よろし、正倉院を内お入るを許さず、寶藏の築垣の外より窺ふ、例の校倉アセクラなり、好古小録に云、校倉の烈日にあふれとも土蒸の氣あく、又雨に逢ひて濕氣を含まぬ、故に其藏る所の物數百年を経といへとも魚食の憂へなし、古人の遠慮往々此の如しと、こゝを出て法華寺にいさる、今此のいと小さき寺なり、此法華寺より西南此のいとうちひらたさる地の寧樂七代の朝比都の跡にして所此字よも大極殿などいへるお今よ存せるよしなれと今の其花もあげどになく皆田畑となりたてにさるむいとあななら此葉此名よおふ宮のふること絶えて久しき代といなりよき

それより西大寺よりゆく、東大寺より比ぶれば甚麗なり、伽藍も朽て四方の圍は崩れなども崩れあり、古のおもかげをありなり、此寺も孝謙天皇の勅願よりて、天平勝寶元年より天平神護元年まで十七年をへて落成せりといへば、むろしの莊麗美麗よりて、いと大きな寺なりなるべし、菅原の里より菅神の社あり、此向ひの荒れたる草むらに中より古き堂一字建てり、これもとの菅原寺の遺跡なるべし、此古堂は當時大佛殿は摸範としてまつ造れるものにて即其十分の一の形ありといふげも他堂の形といふと異なり、當寺は聖武天皇は御創立なり、東大寺よりこゝまで一里半ばありなり、此田畝は中より御歴代の御陵多くあり、まゝ伏見の里も此邊よりあり、古今集よいざこゝよ我世をへる菅原や伏見の里はあれまよくをいよめるに此所なり、此行手よ、土俗蓬萊は丸山といふ所あり、垂仁天皇の御陵より即菅原、伏見、陵なり、周ぐりより大なる堀あり、

唐招提寺も菅原に南よりあり、西大寺よりこゝまで二十五町あり、孝謙天皇の宸筆は唐招提寺といふ額を掲げたる樓門今をなし、とりこぼちなるにや、前の堂を金堂といふ、本尊は丈六は釋迦なり、後堂を講堂といふ、本尊は彌勒なり、此講堂は奈良の朝集殿を施捨せたるなりと、扶桑略記元享釋書等よとえり、藤貞幹の好古小録より講堂といふ説は誤りよて、朝集殿を移りたるに金堂なりといへり、此兩堂は幸ひよりてこれまで火災を遭れたるよりて、古代の面目を存せ、そもく當寺は天平寶字三年の創造にして、大殿は唐、如寶講堂は唐、法力經藏は唐、義靜の造れるなりと、元享釋書よ見えられ、其構造の法は皆唐法よ據りたるものなる事疑ひなし、寺號を唐招提寺といへるも其意あるべし、藥師寺は西の京よりあり、唐招提寺より四五町ばあり、南よりあり、境内いと廣し、堂はいづれも大破よ及びり、今にして保存の方法を設けざれば、數年を出

ギ一て此古色を觀ることを得ざらむべし、舍人親王の銘を鐫たる際
ハ此寺の塔あり、塔ハ三層なれども、屋蓋ハ六層ありて、一層毎ハ大小
あり、他寺の塔と其形甚異なり、屋代弘方ハ此塔ハ昇リ上層の外ハ出テ、
九輪の基ハいたり、銘を摺せしといふことを、かねてきゝをりしハ、今此
處ハてこれを望むに、いふよ一て九輪のもとハいたりけむとおもふ
よ、身の毛もたつばありおそろ一うおぼゆ、其銘ハ左ハ如シ、

維清原宮馭宇

天皇即位八年庚辰之歲建子之月以 中
宮不念創此伽藍而鋪金未遂龍駕騰仙大
上天皇奉遵前緒遂成斯業照先皇之弘誓
光後帝之玄功道濟郡生業傳曠劫式於高

躅敢勒貞金其銘曰

巍巍蕩蕩藥師如來大發誓願廣運慈哀猗
猗聖王仰延冥助爰飭靈宇莊嚴調御亭亭
寶刹寂寂法城福崇億劫慶溢萬齡

按、清原宮馭宇天皇ハ天武天皇ナリ、日本書紀ハ此事を載せて九年
十一月とす、此銘ハ八年といふものと一年の差ハあり、但、舊本の日
本書紀ハ、壬申の歲を弘文天皇友大の元年とし、翌年の癸酉の歲を、天
武天皇の元年と云たりしを、後ハ弘文天皇の紀を刪除し、天武元年を
のぼせて壬申と云たるよよりて、此差ハハ出來しなり、されハ今本の
日本書紀ハ、後の刪定ハ係れるものよて、銘文ハハたハ當時の實を傳
へたるなり、是瓊たる銘文といへども、史の關係する所甚大なりと

そこれら此ことのくはしき辨論の、日下部勝牟の際、銘、釋、又の伴、信友の長柄の山風等も見えたれを、往見せべし、

又例の佛足石の此塔に向ひよ、小さき室ありて内よ安置せり、住職より見て見んことを望むたるよ、そとやのよ諾して室をひらきいとねんごろよとせたり、石の高さ濶とも二尺あまりよて、上よ佛足圖あり、四周よ銘文あり、佛足石、歌、碑も此内よあり、高さ六尺あまり濶二尺五六寸なり、自然石のまよて前面よ歌を鐫りつけたり、猶見るべき所をまたおれど、のぞりある日數よて先をいそげを、旅亭よへり晝の食事をして、午後二時頃こよを出て、興福寺の境内をとき、押上町より般若寺町をへ、奈良坂を越え、宇治よとおもひたつ、木津川をまたり、玉水長池などいふをへて、午後六時宇治河此岸なる萬碧樓よつきぬ、家此名の菊屋といふ、屋の構造甚美麗よして、宇治河此西岸よあり、樓上にいたれ、宇治河の

眼下よ流れ、たるよ朝日山よむのひ、あなたの方よ並きたてる古木の松のいく千本やあるらん、をちのこのおら、松原と日本紀も見えたる、尤此よりあるべく、大山守命のわもこよこむとよと給ひもこの川瀬あるべし、此よ宇治橋あり、なれいといとくして、橋の杭よ水此激ぎる音風雨のとあやまゝる、河下遠く榎、島、豊後橋を見る、眞よ絶景なり、此橋を豊公此とき豊後の國主大友氏此造れるなり、故よ其名をおほそといふ、此川の琵琶湖より落ちきたりて、石山此麓をめぐり、宇治よ來たり、豊後橋をへて、淀川よ入るなり、やよありて、家婢酒肴など持來たる、旅中の暑さと勞れを養えんとて、盃をあたむくるほど、俄よ空のきくもり、雨ふり出て、篠をつくの如し、一段の景色をそへたり、東京を出てよりはじめて雨ふる、まばしのほどよ雨のたれたるよ、げふの陰曆の九日よて月いと高くあがりて、樓の内よ光りさし、いりたる、えもいとせめてた

しもれ出る月のあけけなどうち誦つゝ小中村ぬーとゝもよ夜ふくるまでくるとゐたしてやぶて蚊帳のうちよいりぬ、

世をうちと誰うひいひー山川の清くさやけくむらほーき里朝とく超出て

朝日山のほる日あけよ旅衣日をへー袖の露やほさまー小中村ぬー

波の音よ朝戸あぐれを風清とふーとよかよふ宇治の川霧などいふーこゝを立出づ、

十八日晴暉午前八時萬碧樓を出て平等院よいたる扇の芝へ此門前の道は側よありて小さき石ふと立てり源三位頼政の扇をひらき其上よ坐して屠腹せし所なり故よ扇の芝といふ平等院の宇治橋の南よあり、舊源融公の別荘なりーを長徳四年御堂關白此院を得て別業とー遊覽

の地となりたり其後子息宇治關白頼通公これを傳へて寺となり平等院と號し佛殿の鳳凰を象り左右よ高樓ありて廊をめぐらしこれを兩翼とし後背よも廊ありて之を尾とぞ故よ鳳凰堂といふ屋上よ青銅をもて造れる雌雄の鳳凰あり風よ隨ひて舞ふ本尊の阿彌陀佛よして長六尺ばかりは坐像なり定朝の作といふ堂内の長押よ廿五菩薩の像あり四壁及び三方の唐戸よ淨土九品の相を畫く繪師の長者爲成の筆上の方よ色紙形の圖ありて觀經の文を畫く中納言俊房卿の筆跡なりといへど剥落してよく見えぬ堂の扉よ佛像を畫くこと、榮花物語またつれー草等よとえたり此堂の永承年間頼通公は創立よして曾て回祿の災あり今猶當時の面目を存し實に奇觀なり此堂の前面に池あり阿字の池といふ其形梵字は梵字に似たるが故なり釣殿の此池の側にあり宇治文庫の跡の堂は南の高き所なりといふ、向くて裏門を出ても

との方に向ひくれば、町の中らに橋姫の社あり、いと小さし、これより伏見に三里程あり、小倉堤を歩き豊後橋をまたらんとおもひ、堤に崩れ所ありて通路なり、たしといへば、向ひにまたり六地藏越をせんと、小倉の池の方數里ありて、満面蓮を生む、常々方今花盛なるも、いかにせんこと、一の出水の爲に水にうづもれて花の一輪も見えず、宇治河橋の例の出水にて半ら損したれば、船にてまたる、いと小さき船にてさうまく水を横きるに、ものごとくおほえたり、向ひの岸にたれば、高き所に常光寺といふ一小寺あり、放生院と號と、又ハ橋寺といふ、孝徳天皇の大化二年に、釋道登る建たりといふ、宇治橋の碑ハ、此庭にありといへば、たぼりて一覽す、舊の碑ハ土中に久く埋没せしを、寛政年中此寺の庭中を穿ちて獲たるなりといふ、されど斷碑にして僅に二十五字を存するのと、現今の碑ハ尾張此人小林亮道等の補刻せるなり、猶川べりにそ

ひたる松原を南に三四町ゆけば、離宮八幡の社あり、下の社の菟道稚郎子の御魂を祀れるなり、こよりあとのあたにありて十四五町を行けば、黄壁山萬福寺なり、五箇庄ハ東にあり、隱元和尚の創立にて、和尚ハ大明福州の人なり、惣門を入り右の方に池あり、放生池といふ、山門の次に天王殿といふ堂あり、布袋和尚の像を安置す、金色なり、これを入れハ佛殿なり、右に知客堂、左に祠堂、又天王殿の左右に鐘樓と鼓樓とあり、大伽藍にして殿宇廓廓いと多し、殿宇の間四方に廻廊あり、雨中にても笠を用おす、一て通路すべし、開山堂ハ隱元の像あり、隱元和尚の墓の上に六角の小堂あり、木菴和尚の隱居したる所は、今萬壽院といふ、惣門の左の方あり、本堂のうしろの山を妙高山といふ、其外子院多し、たくの山の麓ハ一切經の板を彫り、又は摺り出す所あり、けふも多くの職工ども板を摺り居たり、一山すべていと清らか、よて廣き庭のうちに塵ひとつ

に置ざれば、まをいたゞむほども心身^{サシヤカ}爽快^{サシヤカ}蕭灑として出塵の思ひを
 なす、こゝを出れば向ひに榎、島小倉、池を望む^{榎島の中よひに水たせり、}へそれ
 より木幡比里六地藏町をへて、大龜谷村をこえ藤森にいたる、社、舎人、
 親王を祭れるなり、此あたりの惣名を深草といふ、夫より稻荷の社にま
 うづ、

夏なほら暑さゞくへく稻荷山迄る一の杉やをりあさゞま
 ねきこともとつ社のごつ垣にうけてそいのる御代比さるえを
 山中に稻荷の祠いと多くあり、これ三の峯比麓なり、立連ねたる鳥居の
 いくらともあくありて、數もあそへがたし、その鳥居のあるあざり行め
 るりえんとて、山によぢればるにゆけどゞて一あければ、山比半ら
 よりあへりぬ、小中村ぬゝこの比ざり口に待をれり、此所にて中食し、
 それより東福寺にいたる、伏見より京にゆく大路比右にあり、門は街道

に向ひて三所あり、南門中門北門といふ、此間凡四五町もあるべし、南門
 比内の左右松原なり、中門を入りて左に閤門あり、本堂法堂方丈の近き
 頃焼失して側なる僧堂のとれこれり、佛像の假にこゝに安置を、正面の
 釋迦佛にして左右の觀音彌勒なり、本堂の東南比方に鎮守の社あり、下
 に十三、石塔立ち、比良山明神の塔といふ、又東の方に月輪攝政^{實録}公の墓
 所あり、新たに造營成りて美麗なり、法堂のうしろに通天橋あり、幸ひに
 災を遁れたれば、これをまたる、法堂より開山堂にいたる道にして、橋上
 及び前後のそべて廊をめぐらし、橋の下へ左右巖石にて疊きたる一流
 の川なり、これをとほりてやゞれば、開山堂なり、左の方に普門寺と
 いふ寺あり、壯麗なり、開山堂のうへに閤あり、傳衣閣といふ、前面の廣き
 庭にていと清らかなり、また通天橋比下のあたりに小さき橋殿あり、臥雲
 橋といふ、これよりくざりて北門にいたる、右の方に三聖寺といふ古寺

あり、北門を出き、即伏見街道なり、右にをれて泉涌寺にいたる、惣門を入りてまばらしく行て少くはばり又くどりたる所に本堂あり、本堂のうしろ右の方に御靈殿あり、近頃新たに御造營なりと見えて、いと新らしく美麗なり、此うしろ北山に近代比帝王の御陵あれど、こゝにハ行く事を許さざれを下より望み拜す、こゝを出て三十三間堂にゆく、智積院の西大佛殿の南にあり、寺號ハ蓮華王院といふ、後白河天皇の御創立なり、荒れえてたれど堂内の佛像ハ今も多く存せり、本尊ハ千手觀世音の坐像なり、長八尺大僧正行慶小佛師康慶康永の合作、又檀上に安置せる二十八部衆の像ハ東寺ハ佛師運慶の作なりといふ、其他一千鉢の千手觀音を左右に列す、大佛殿ハこゝよりほど近き所にて寺號ハ方廣寺といふ、建仁寺町通馬町の南にあり、本尊ハ首より上のこゝにて、未造りをはらぬ、抑當寺ハ正親町天皇の御時、南都の大佛殿に擬して豐臣秀吉公創

立する所なり、其周圍の石垣の巨大なる驚くべし、秀吉公、譜に初以小石築之、恐人之盜、故以魁石改築之、其運鉅石也、甚極群黎之勞、其預于經營之用者、毎日五千人といへり、いづれも諸侯の寄附せしものなりとぞ、まかるに慶長元年七月の大地震にて佛殿悉く崩る、同七年秀頼公再建し銅像を鑄るとき失して焼亡したり、同十五年再ひ金銅を以て造る、後五十餘年をへて寛文二年又地震して破壊せしかば、同七年木像を造れり、寛政十年七月朔雷火に罹りて、堂宇佛殿悉く灰燼となれりといふ、南の方に豐國神社あり、又文錄朝鮮の役にうちどり、敵人の鼻耳を削りておくりたるを、集めて埋めたりといふ耳塚ハ大佛の前街道の南にあり、舊主妙法院、宮の跡を拜し、御鎮守新日吉神社を拜す、智積院と妙法院との間にあり、五條坂の若宮八幡に詣てそれより清水寺にゆく、前の坂を三年坂といふ、坂の兩側ハ陶器をひさぐ家多し、二王門の前南側ハ小

さなる三重、寶塔あり、子安塔といふ、二王門を入り石階を昇れば西門なり、二天を安置す、西門の東に三重、寶塔あり、此東に經堂東北に隨求堂あり、こゝを通りて中門にいたる、西向なり、前の橋を轟橋といふ、これに入りて直に本堂にいたる、舞臺の左右に休憩所あり、こゝより見おろせば平安一望絶景といふべし、下は音羽の瀧ありて臨み見るべし、細き瀧三筋あり、此水いとひやうなりといふ、拾芥抄にこれを五名水の一とせ、此山櫻多し、八坂法觀寺に五重、塔は市街の中あり、寺は頽廢してなし、塔もいと朽たり、最上層に柵の如きものをめぐらせり、北條氏不慮に備へんとて、家人を常々此塔の上をらしめ遠見せしめむ爲に設けたるなりといふ、八坂神社の舊の感神院なり、祇園坂のうへにあり、鳥居の内は樓門中門拜殿ありいづれも美麗なり、社内も廣し、東の方裏門を下れば智恩院の南門にいつけさ宇治を出てよりおまたの神社佛閣また舊

跡などたづねたるにいとくたびれ且日も夕ぐれちろくなりおたれば、三條木屋町にいたり、萬青樓に投宿す、十九日晴水けふは小中村ぬしこちありといへむ、おのれひとり東山をたりを見ありむとて、午前八時頃より宿をいづ、先智恩院にいたる、當院は祇園の地つゞきにて東北の方あり、惣門のうちには松と櫻の並木おていと廣し、こゝを櫻の馬場といふ、小鍛冶井の山門の石階の下右の方あり、三條小鍛冶宗近に此水を以て劍を打しよりて名づくといへり、山門を入れは兩側は松の古木生えげれり、右の方には鎮守八幡宮の社あり、本堂は南向にて圓光大師自作の影像を安置す、堂の後面に釋迦佛像を圖す、法橋徳應の筆なり、西に阿彌陀堂あり、丈餘の坐像ありて春日佛師の作なりといふ、東に經藏あり、經藏は福州開元寺の本なりといふ、方丈の佛間には阿彌陀佛の立像を安置す、快慶の作なり、間ことの壁

又襖等の皆金地極彩色の畫ふて狩野尙信政信の筆なり、圓山の安養寺の傳教大師の開基なり、當山坊中の書院の自ら高樓の姿をなし、京城のなつばを見おろし、いと奇觀なり、かつ庭のたゞずまひ池の心、いづれもとやびやろりて、洛陽遊筵の地多しといへども、此地を以て第一とすべし、鷲峯山高臺寺の、豐臣秀吉公の北の政所の創造ふりて、莊嚴美麗の伽藍なり、佛殿の本尊の釋迦佛迦葉阿難を安置す、客殿小方丈等の畫の、狩野元信弘意永徳及び了溪等なり、方丈の唐門の豐公の船屋形を以て造れりといふ、又小方丈の額に豐公の自詠十首をえらるす、聖護院道澄法親王の御筆ありとぞ、豐公及び北の政所の御靈屋の、方丈の後の山上あり、長押ナカサシの上は土佐光信の三十六歌仙の畫を掲ぐ、歌の八條智仁親王の御筆といふ、豐公の影像の二尺四五寸ばかりありて唐冠をいたゞき笏を持給ひ、政所の影像の、法體にて花の帽子を頂き、紫の衣を着け、金紋

萌黃地の袈裟をりけ、右の膝を立て念珠を持し給へりといふ、余拜觀せず、當山の庭中、竹林泉ありて、樹木鬱々として涼風汗を拂ふ、實は佳境の地なり、且大樹の櫻、萩の古株多くあり、春秋の觀またおもひやるべし、青蓮院の白川橋の東あり、書院等を拜觀す、南禪寺の東三條の北あり、總門の内は左右松林なり、山門の前は白川石の大燈籠あり、長二丈餘といふ、寛永年中佐久間勝之の寄進せるなり、佛殿には釋迦佛を安置す、山門は寛永四年藤堂高虎の再建ふりて、大阪出陣のとき討死したる者の牌を閣上ふ安し、又釋迦佛及十六羅漢の像あり、雲慶の作ふりていづれも生けるる如し、余一人此閣上ふありて、此等の像を見るに惣身悚然たりき、又東照宮及び藤堂高虎の木像を安置す、方丈の佛殿の東あり、客殿書院等の龜山上皇の離宮なりしを大明國師が賜へるなりとぞ、其結構いふばありなり、又龍淵室の方丈の書院ふりて、東の間の鳴瀧花鳥等の

圖の古法眼元信、中の間は廿四孝西の間の花鳥の狩野永徳、三の間の水
 比の虎の探幽齋の畫なり、金地院の中門の左あり、東照宮を拜せん
 とて行たれども、けふのさるることありとて許さず、この庭の小堀遠
 州の好めるなりといへば、見まほしありしがせんすべなり、禪林寺の永
 觀堂を拜す、總門の右に蓮池ありて中央に辨財天を祠る、本堂の長三
 尺餘の立像の阿彌陀佛を安置す、願所の相なり、永觀律師衆僧と共に念
 佛を誦するをり、彌陀佛檀より下りて、左の方を願所て永觀遲しと言へ
 り、其後面貌遂に復らざるなりといふいと奇きことなり、ありすべ
 るるたふれごとをいふが佛者に常なり、萬無寺の鹿谷村に北あり
 法然院といふ寺の林叢の間を二町ばありればりて山上あり、門を入
 れば右に鐘樓左に經藏あり、それより玄關前を右をれて行けば本堂
 の正面に出づ、庭前は古木に松林あり、本堂の前及び門の右側は善氣水

と號つくる冷泉あり、此寺周圍樹木鬱々として寂寥たりいと清らあり
 てげに清淨無塵の佛界なり、暫時躊躇の間も自ら離俗のおもひをなせ
 り、此寺中頃廢せしを、延寶八年智恩院の萬無和尚再興せしなり、此奥に
 俊寛僧都平家を亡さんとて、談合したる山莊の跡ありといふ、銀閣寺の
 淨土寺村にあり即東山殿にして義政公の宅跡なり、庭も同公の好むな
 りといふ、佛殿は南向にして釋迦佛を安置す、客殿の畫は海北友雪の仙
 人逍遙軒及び狩野隆也は山水又は土佐光興等の筆なり、東に茶湯の間
 あり、東求堂といふ、四疊半なり、茶亭四疊半の濫觴なりといへり、壁張等
 の畫は古法眼元信狩野永納相阿彌等の筆なり、こゝにて薄茶菓子など
 を出したる、銀閣の上層を心空院といふ、三間四面なり、下を潮音閣とい
 ふ、三間半に四間なり、巖洞の内は觀音像を安置す、坐像にて二尺をかり
 なり、但し庭中あまり廣からず別に見所なし、案内者の庭中の立石又は石

橋池の中島などをいづれも一名稱を設けて言ひ立つれど、あまりこ
とく一いひのゝるをかりきなり、銀閣の銀の剥落して跡もど
くめず、神樂岡の齋場所の八角殿にして四面に戸びらあり、うしろの
神殿ありて左右に内宮外宮あり、本殿を大元宮と號す、三千一百三十二
座を鎮めまつれどこれ維新前の神祇官代なり一此岡の西の麓に吉田
社あり、眞如堂の黒谷光明寺の北隣なり、別々なるすべきやとの事いな
し、黒谷光明寺山門の南向きなり、本堂の千手觀音を安置す、脇檀に吉備
大臣の像あり、衣冠黒袍の坐像なり、堂前古木の松あり、鎧懸松といふ、
熊谷暹世してその着たる鎧を松にかけたればさいふありとぞ、方丈の堂
の右にあり、こゝを少下りたる所蓮池ありて、傍へ小堂あり、熊谷堂
と云、熊谷蓮生坊自作の像及び敦盛の畫像を安置す、又法然上人の廟あり、
勢至堂といふ、この少上に敦盛直實の石塔並びたてり、なふのかた

らふ友もなくして、終日その御寺かゝこの庭など見あるきたるも長
き日も夕ぐれ近くなりたれば、今ひとて萬青樓にかりぬ、小中村ぬ
も晝すぐる頃よりこゝちよろしくなりたりとて、かねて知りたる人な
どをどぶらひて宿にかりぬたれば、いてや四條河原の涼を行むやと
て、夜に入りて宿のあるを案内出て出ゆく、先新京極といへるあたり
のいと賑はうき所なればとてかゝこに行て、さまゝのものうち
見つゝありく、おげお東京にていとむかしの淺草の奥山を、市中お持
出したりといふやうなるさまふて、さまゝのものひさなる商人の家
並なほうちつゞきて見せ物芝居などの小屋といふもの多くありて、人も
多くむれおたり、こゝをすぎて四條のかたに出て、加茂川の流れおそひ
たる料理店竹村といふ家の棧敷をかりて、酒肴など調せさせ、酒くまか
りたるお晝のくるいさもとりかへつるこゝちいていとゆかゝ、河

妙な運命を
お出し玉へり

原の中へのかけ見せといふものあまたありて、さほくのものをは
ぎ、あるのからくりなどいふもの、たぐひも多くあり、河中の淺瀬を歩
行なふらもの賣るもあり、女をらべなどの裾ひきかきつけて河の中を行
かひつゝ、あざれあひたるなどいふき、今宵の陰曆の七月十日
なれを、月もいとさやかか、河の中河岸へいくらともなくかけつらねた
るとも、火のかけも、たゞひとつの月の光へおされて、ゆるる、人造
のいか巧くなるも、天造への及むること、これへても、まゑるきこと、
ぞおぼゆるなど、老のくりことするを、若き今やうの究理家などいへる
先生たちのきゝたらん、いかへいひくたされむとおもへ、いとつ
つま、かくてや、夜も更ぬれば、宿へかへりてうちふぬ、
廿日晴、木曜けふの北西のかたなる古寺名所等を見んとて、午前十時頃よ
り木屋町のやどりを出て、相國寺へとゆく、相國寺へ今出川の北へあり、

境内いと廣し、開基の夢窓國師へて、もとの足利義滿公の建立へて、後
水尾、天皇の御再建なりといふ、當時修繕中へて堂内へ本尊へ置かぬ、そ
れより下加茂へと車はいらす、加茂川をまたり河合の社を拜し、左へを
れて行けば、道の左へ馬場あり、樹木茂れり、右へえたら、川の流れなり、
社は本殿と假殿と、二社並べり、祭神は賀茂建角身命玉依姫の二坐なり、
本社の右のかたへ清泉ありて、泉上にさゝやかなる宮あり、井の上の社
といふ、此あたりの森をたゞすの森といふ、泉へ傍ひて茶店あり、いと清
や、あふゆ、水のなれ出る壺のうちへ、多くの兒とも遊びおたり、あ
てのけふの暑さもおぼえざるべし、おのれも此水をむそびて、
袖ひちてむそふたゝ、そのまゝとつひこゝろも清くなり、おけるあ
小中村ぬし
あけて、しも神のめくをあふく、あ衣手と、し加茂の河水

社の右にたふ小さき宮あり、ひらぎの社といふ宮は前々杉木多くなり、また外の常磐木もまじりてたてるを、かた枝のひらぎの葉なかりたるあり、また半らむりひらぎななりて、其半らむりこと木にてあり、里人のいへるふ、他の常磐木をこゝに移し植れば、年をあらねて迷ふ皆ひらぎとなるなりとぞ、いとふらぎなることなりあり、これより上加茂までの廿町餘ありといふ、此行手おてこれば、右のたふ比叡の山ろびえ、むるか向ひふ鞍馬貴船の山々をゆ、上加茂の拜殿のうしろおきたら、川の流をありて、三橋を並べて架たり、中の橋の屋を覆へり、いはゆる橋殿なり、此川本社の前よりめぐりてこゝにいたる、故本社の前にも橋殿あり、これをまたりて廊門を入り、石階を昇れ、本社なり、下加茂よりの壯麗なり、神殿の東にたふ高く聳えたる山、これ御生山なりといふ、又、日蔭山、二葉山などいふ、紫野の大徳寺、今宮の南

ふあり、佛殿はうしろに法堂あり、いづれも廣く大きく、又うしろに一堂あり、雲門菴と號し、其廻廊ありてゆきとせべし、方丈の殿のうしろあり、山門の連歌師宗長は造立、閣門の千利休の寄進なりといふ、此地の當時織田大臣の冥福を托して、羽柴秀吉公は天下の威權を握掌したる處ありて、今おもふにもいとさまきこゝちぞ、こゝより車をはしらせ、健勳神社を拜し、社は道より田のへどてたるむらひの岡ありて小さく、且社内もいとせむし、いふ、天正の頃、縁をぢの如く、世の中とだれおとどきたるを、此君まをのたけき心をふりおこして、仇ともうちきためて、皇居の荒たるを繕ひ、廢れたる儀式なども起したる、いさをあるを以て、今は大御代となりて、おのく、祀をなすなり、こゝを出て北野にゆき、天満宮にまうづ、表門の前は左右に松の古木並たたり、裏門のたふ木屋といふ茶店あり、こゝにて中食を、小中村ぬり宮司某の家を訪ふ、

それの社内お待ちおたるお人をして迎へたればゆきたるお主の稀れ人の來りして酒肴などを出してもてなさんとぞそもくけふの嵐山までゆるむとねておもひおきてたるを、永き日もちや午後三時過ぐるほどおなりたれば、心いそぐを、小中村ぬいの何くれとものがたりなどして、杯おたむくるおいと心いられて、おをくそこのかいつきば、おおくおたちいづ、おるじいおきりおとめまくとるを、おひて謝絶し車いそがせられたを、おむしがほとお金閣寺おいたりぬ、平野の乾衣笠山の麓おあり、鹿苑寺と號し、金閣の足利義満公の建つる所おいて、三重の高閣なり、第一層を法水院といふ、彌陀三尊夢窓國師及び足利道義公の像あり、第二層を潮音洞といふ、自然木の觀音四天王を安置し、第三層を究竟頂といふ、後小松天皇の勅額あり、板敷三間四面一枚板なりとぞ、板敷及び四壁の板ことくく金箔を押したりしを、今の剝落して僅お其痕跡を

とるのと、閣前お池あり、佳景なり、また奇石多し、うしろれたの山お縦目峯と號する峯あり、眺望奇觀なり、ここのお夕佳亭といふ茶室もあり、其構造常の造りざはといと異なり、此ほといさはくの古書畫古器物を日ごとおとりおへつゝ虫干とるなりとて、奥殿おならべたてたるを見るおいとめづらしとおぼえし、蘇東坡の肉筆の詩、狩野古法眼兆殿司の畫、足利義政公の遺物お釜などなり、佛殿の襖の皆探幽の墨畫なり、こより等持院おいたる、寺も堂もさせる事なし、足利將軍十四代の木像を安置し、いづれも肖像とおぼしめて、其像の大小長短同じからせしめて、其面ざし格好も皆異なり、いづれも衣冠なり、維新の前尊氏の像を斬りたりとき、こが今猶あり、其後修補したるおや、かくて仁和寺お行かむとて車はしらし行手の右にお龍安寺といふ寺あり、入りてお見せ、仁和寺のおと仁和のとおと光お御草創おて、寛平法皇宇先帝の御願をつがせ給

ひて、御造立ありしを、おれ應仁のときれ、灰燼となりし、おさまりの
 りき、今此の寛永年中の御再建なり、御所の山門を入りて左のあたふ
 り、うれより中門を入れを金堂なり、前ふ櫻樹數多あり、春のなめり
 一ほならん、大内山の此うしろありといふ、御所の其結構いふもな
 く、おろくなり、おねてきく、およびたる鶯張の縁いと奇なりて人
 おゆむおつれて音を發せ、御所中いづこも皆この縁なり、又孝光天皇の
 御寢殿を其まゝお引うつしたる間あり、ひさまづきてをろくまづる、
 こゝより鳴瀧の里をへて山ごし、廣澤池の岸お出たり、此ほとり此道
 を俗傳お千代の古道といふ、佳景なりて閑靜の地なり、池の寛朝僧、正の
 つくりなりといひ傳ふ、山と山のあひひあり、嵯峨の清涼寺の小倉
 山の東おあり、本尊の釋迦牟尼佛なりて毘首羯磨此作なりといへとい
 る、おあらん、本堂の右お阿彌陀堂あり、棲霞寺といふ、もと融大臣の造營

なりて棲霞觀是なりとぞ、こゝを出て大覺寺おいたる、門前の左右の松
 林おて林中の一圓お萩あり、御殿と佛殿と相並びてたてり、佛殿のう
 ろお護摩堂あり、庭前いと廣く清淨なり、嵯峨天皇の故宮を精舎とい
 るよ、三代實錄おとえたり、猶よく拜觀をべくおぼゆれど、はや午後六
 時過たれば、嵐山へといろく、天龍寺の元治此をりの戦ひお焼け失せて、
 たゞ礎のときこれり、定家卿の小倉此山莊の跡も此近きほとりなりと
 いふ、とくそるうち嵐山おいたりぬ、こなたの岸邊なる茶店おいこひ
 て、うれより小舟をやとひ棹さゝせて大井川をさるれば、近き頃此お
 くお鑛泉おき出て、うこお浴場ありといへば、ゆきて湯おとむとてなり、
 渡月橋の左の方川下おあり、やゝむらひの岸およりたる、たお中島お
 りて、東西より此中島おけりたせり、此ほどの水おて橋の少く損じた
 り、嵐山の此川おろひたるむらひの山なり、いと高き山おて、麓より峯ま

で櫻楓樹松其他の木とも生ひいでり、下の激流にてうづまく水の巖おふれてあがれゆくけしき、えもいれぬおもろし、此二とせ三とせがほど此山のけやきの木お出れつけりといふ、けし松と櫻との間おありとある楓の葉、皆薄赤くなりて、さあがら秋のもとのけしきを見せたる、此とせえひのへりて我どちのさいはひなりけり、さてこの小舟おて川をたばるお、左右の絶壁おいて、川中おの山より落くづれたる大きな巖のいくらともあくありて、其風景筆おつくしがたし、支那の明畫などいふものうちおて、くくけるけしきをば見たりき、右此方の巖壁お霧島つゝじいと多く生ひたり、花のときおきあひたらまゝくおぼゆ、大悲閣の山の中段おあり、これを望むお恰も空中お架したるが如し、此所お角倉了以の碑ありといふ、此人大井川の巖石を破碎して、はじめて丹波より舟を通せしめたるなり、十四五町もたばりてったへた巖

石此うへお浴場あり、上りて浴をこゝも出水のをり流失したるを、いま假りおまつらひたるなりといふ、いと茅屋なり、礦水の炭酸氣と少し鹽氣をおびたり、くくて夕ぐれちくくなりたれを、もとの小舟おのりて下りて、この茶店おいたり、やがて車おうちのり道をはいらそ、歸路太秦の廣隆寺の前をよぎる、日くれたきお入らぬ、このいとあやしきとせなる牛祭の神事、このおて行ふなり、二條の城も車ながら向ふお見おたりたるのとなり、午後九時おかり木屋町のやどりお歸る、廿一日晴金けふの大内を拜觀おべしとて、九時おかりより小中村ぬしと、お出たつ、先御臺所門よりいりて、殿掌お申しられたれば、殿部をいて案内せしめたり、さて屏重門をへて平唐門を入れ、向ひの神嘉殿なり、もとの公卿の間お昇り、うれより清涼殿おいたる殿の東面おいて階下お御溝水の流れ清くそ、くみゆ、其汀お竹臺あり、此竹の雀のこ

ふ群れきて鳴聲を聞しめさんが爲ふ植たるありとぞむろりの竹ご
 いの筭をとりてとづし所ふ給ひてゆで、御膳のをりまおらせし事、又
 の御前にて王卿など詩作りて講ぜられけるをり、御溝水ふ盃うかべて
 酒にきたることなど、古記ふとえたれば、竹もいと生ひえげり、御溝も廣
 くてありなるべし、今の形をありとぞおほゆる、
 竹臺れもとめて小中村ぬしよめる

河竹のよ、れむろりのまこれられて大宮雀のしことあなく

殿内なる御手水の間、朝餉の間、臺盤所、鬼の間、石灰の壇、夜のおと、弘徽
 殿、萩の戸、藤壺などことごとく、拜觀と、石灰の壇の御殿の東南に隅ふあ
 り、石灰にて壇を築き、其うへに砂をまけり、毎朝諸神御遙拜など行はせ
 給ふ所なり、年中行事の障子及び日給札、今も殿上ふあり、日給札は笏
 此上のあたれ尖りたるが如き形なり、櫺形の窓の南の壁の隅ふて、鬼は

間のあたひの柱をはさみてあきあり、女房だちの殿上の事を、この窓よ
 りくるためなりとぞ、空柱ウツホベシラの長橋と竹臺とのあたひふあり、御殿の屋根
 のつまし、行あひの雨水をもらさんが爲ふ、柱の中心を空ウツホふしてその
 内を雨水の落るやうふえたるなり、弘びさしより南殿ふおもむく所、
 昆明池の障子、荒海の障子立てり、枕の草子、清涼殿のうしどらの角、北
 のへごてなる御ぞうし、荒海のあたいたるものども、おそろしげな
 る手長足長をぞあられたる云々、といへる、この事なり、紫宸殿の額に
 加茂、保孝、比筆なり、高御座の前、獅子狛犬あり、賢聖障子の北のあたふ
 立てり、この寛平の御時、巨勢、金岡をいてあしめ給ひしより、今ふ之
 を寫し傳へ給へるなり、中央御帳の間の障子、獅子狛犬及び書カキおへる
 龜の圖など、禁秘御抄ふとえたるが如し、猶ことごとく拜觀せまほしうお
 ぼゆれど、間ごとふ立たる戸を押あけつ、拜觀せざることをなれた殿

部の勞もいゝあらんとやがて職事部屋麿香間などをぞぎて下りぬ、
うれしくも大内山へけいりてむろし此跡をたつねえしや
小御所御學問所などの常へ拜觀を許さぬおきてなりといへばまう
此ぼらぞかくて晝ちのくなりたれば、東山此八坂神社のあたへなる中
村樓へ行て中食をこゝへも豆腐をむねといたる家なるを今のこゝ
此會席と西洋料理とをその好へ應じてそるなり、家もうるひし、小中村
ぬしと共へ西洋のをとゝのへさせたるへ調理のまかたいとよろし、そ
れより陶器賣家また書肆などこれかれたづねて、物買もとめて木屋町
へかへりぬ、
廿二日晴土曜けふの西京をたちて伊勢路へおもむかんとおもふを、小中
村ぬしの八幡へ行たるへよりて、萬青樓へて終日日記などかきあらた
めをり、

萬代もかひらぬ松の色を名へおひたる宿の久しからまし
などひとりごちたるへ、主の耳とくもきゝつけて、たふざくふらきてよ
とこをるゝへ、いなとたたくてまゐりて與へぬ、

廿三日晴日曜午前六時萬青樓を出て七條より大津までの瀛車ほうちの
る、赤穂浪人大石良雄の潜居たりといふ山科の里へ此線路の下は左
のかたなり、此里の敷の内へ大石屋敷といふところありて、安永年中建た
る碑壹基ありとぞ、それより逢坂山の隧道へかゝる、此隧道へ入らんと
そる前瀛車へともし火をともしたり、されど隧道をとほるほとひいと
くらくして、乗合の人の顔だへよくのまわれぬ、へかへ日くれたるこ
ゝちぞやゝありてとほりそぎぬればもとの晝となりたり、かくて大
津へつきたるへ八時ばかりへもやあらん、こゝへて朝の飯を食し、車を
雇ひて湖水を右へ比叡の山を向ひへみて三井寺へゆく、觀音の堂へ山

のうへおありて、こゝより湖水を見おろせば、かた八景の目の下おありていと壯觀なり、此堂より一段のぼりたるどころお、明治維新の際戦争おて死したる者の爲お建たる記念碑、又其をり用おたる刀鎗等の折たるを、板お並べ結びつけてあり、本堂の右にかゝお少一下置たるどころお、三尾の神社とていふめいき社あり、これより少一おくお龍宮より上りたるなりといふ大きな鐘あり、鐘のいぼも皆おれきれて平ららおなれり、俗おの辨慶が引づらひたりをりおそれたるなりといふ、食堂の前お古びたる大なる鍋やうのものあり、源平の戦ひのをりの兵糧を煮たるなりといふ、こゝもあらん、こゝをくたれば圓満院の宮の御殿の跡なり、今お滋賀縣の廳となれり、此をこゝ先お兵營もあり、これより大津の町をよぎりて石山寺おゆく、道おてきけお唐崎の松、此三井寺より北の方お一里ばおりもゆきたるところよて、此所より一里半お

あとのあたおなりたりといふ、立おへりてみるとおもひつれど、ちや賜暇の日ものこりそくなくなり、されを、先をいそぐ道のまゝおへりてふさゝびこゝにきさらんに、おふゆくべいとあらおじめおもひおきてさる里までの、えゆくまじきによりて、心おらずも見のこゝてゆく、

おら崎の松とまりせお立よりてと、おまゝものをくやゝありたり道の行ての馬場村といふ所に義仲寺といふあり、木曾義仲戦死の地にして寺、天文廿二年の建立にて石山寺の末寺さりといふを、今お一の草庵おありて、俳師これを守れり、側に石の寶塔一基建てり、まゝ芭蕉塚及び祠堂あり、これお翁の遺命によりて、其遺體を、其角其外の門人ごちのこゝに葬りさるあり、翁の句に、木曾殿と脊中おえせの寒さおあといへる、こゝ此事ありほどおく石山にいさりぬ、湖水の流にそひて家つくりさる茶店にいこひ、まゝおて山おればる、麓お胎内くさりと

呼へる岩窟あり冷水涌出てくるもいと涼し、本堂の庭前ふり數多の奇巖怪石積て山をなせり、眞に天然の盆石なり、紫式部の籠居まよひといふ源氏の間へ本堂の内の東隅あり、入口へ二重折の開き戸あり、内へ八疊敷をありあり、狩野右近のあらる式部の像をあらり、近衛三菟院殿の讀あり、其下ふ式部の用おふりといふ文机硯及び自筆の經文一卷を置たり、此所のや、後に好士のもの、作り設たるものあるへくおぼゆ、そべていづこの名所舊跡にもあらる人まよひあることをあそもの、古へも今もまよひあることなれば、よく古へのありやうと書おえらるることを交へ考へてとるべき事なり、まよひや、此ばかりある東の方ふ式部源氏物語を起草し、ふりといふ觀月亭と稱する茅屋あり、此より見れば、琵琶湖を眼下に見おろし、勢田橋もたるの向ふに横あらりて、風光の絶景恰も一幅の圖畫の如し、むろし天武天皇と大友皇

子との御たゝのひありし所なりとおもへいといふこと、あくて山を降り湖邊をめぐりて勢田橋にいらる、中らに築島ありて橋も左右にせせり、近江國中の水こと、く爰に聚り此湖に入りて、其末流宇治川を経て淀川に出るあり、橋のあらへ龍神、祠と俵藤本、祠とあり、又遙の向ひに三上山とゆ、俗に蜈蚣山といふ、これあり、此山の他山につよのそして、孤立していと高く、其形の富士に似てよき山あり、勢田より見れば、せせり、眼の前にとえていと近くおぼえらるを、ゆけと、此麓にあらざりて、日めも此山を向ひに見て、その南東にあらるをうちめぐりて、午後七時頃水口の丸萬に着き、
廿四日晴月々ふり、まよひきほどに鈴鹿山をこえんと、午前五時水口を出づ、朝霧いと深く風ひや、らにて肌さむし、土山をそぎて鈴鹿山の峠の茶店にていこふ、

鈴鹿山朝こえくれむ八重霧のふえまにこゆる峯の並松

小中村ぬし

そこの山我こえくれむ岩もとの松よりかよふ袖の秋風

そべて此あさりの左右高き山々あさありて古き松の並たてるたしき

いとよしおのれまた

そこの山むくいの關の跡たえて我をとむる山郭公

有馬にて鷲をきくこゝにては郭公のほのゐにゐるをきたり山中の

氣候おもふべし此峠をくごる坂の右れつゝに鈴鹿神社あり坂下の驛

をそぐれば金岡の筆捨山道の左にあり今うち見るにさのこめつら

き山とも見えぬこれほどのけしきの金岡あらでもなとの寫し得ざら

んとおぼゆされと山に木のきりくひの跡多くあるは近き頃此山の木

も伐りとりたるものにてそれが爲景色を損じたるものなるべし此ほ

との人のうらやうのこととるをいみじきとざありと心得て、名所舊跡
あどをこごりに壊ちりこねるふ多きといふふひあきことども
なり、關の驛をそぐ此所鈴鹿は關は舊址なりとぞ此驛は東の方より右
に折て参宮道をゆく、楠本棟本等をへて一身田にいさる、高田山専修寺と
いふ大寺あり、眞宗の本山にて、本堂二十四間四面左の方に阿彌陀堂あ
り、十八間四面にして、莊嚴美麗あり、阿彌陀堂の側に御靈屋あり、此寺は眞
惠上人寛正六年の創立といふ、けふの舊曆の七月十五日にあたれば、こ
ゝに詣づる善男善女群集していとにぎはし、棟本より一身田に行道
に、高野尾といふ所の東北野中に、錢掛松と稱する古松あり、其昔太神宮
の行宮は跡ありしをもて、まゐるし此松を植て小祠を建てありし、小祠
はあくありて松のこ残きり、参宮の人々爰にて太神宮を遙拜し、御供料
として錢を松の枝にうたりしより呼びあらへりといふ、こゝより津

にいたる、此所も前に藤堂氏に知りし地にていと繁昌の所あり、町數七十二町あり、舊名安濃津にて、古へのあはれ、松原に此あたりにおり、あらん津の町をづれに岩田橋といふあり、長三十間をかりなり、此向ふを岩田村といふ、それより垂水、藤瀨といふをへて雲出川にいたる、まゝ三渡川をまたれ、六軒茶屋といふ所あり、午後六時をりり松坂にいたり、米屋といふ家お宿と津より松坂までの五里なり、午後七時雨ふり出たり、

廿五日朝曇午後晴、火々ふ、伊勢の太神おまうでひととて、とく起て朝きよめ、て宿を立出づ、橋田川、秋川などをまたる、いづれも橋あり、齋宮村をめぐれば古への齋宮の舊跡あり、あたまかみの宮なり、松杉などの木少し、さてり、坂土佛の參詣記、齋宮お参りぬ、いほへは築地の跡とおぼえて、草木の高き所々あり、鳥居の朽残るるが道お横たれるを、人

ごおもかくとまらせむを、たゞふし木とのみを見て過なまし、とあり、さむより盛なりし齋宮跡も、あくなりゆきし世の末こそあなしきものあはれ、鳥居はあはれ袖も泪おくちをてぬべきこと、ちと、

いほへをまのふ草はとまたりおひていつきの宮の跡もとめ、車引をのこのこと、なん齋宮の跡なりといふをきつて小中村ぬし

をへそへそれともまらし跡をえしいつきの宮は露のひありを明星小俣あとの村々をへて宮川をまき、山田は入口なり、外宮の北御門迄三十町あり、むらし齋宮群行の勅使参向の時、此川おて禊せしなり、川はこなまの中川原といふ、諸國の參詣人を御師より人を出してこしお迎ふ、今のこれらのこともすべてなし、山田の外宮神前の町なり、参宮の道二道あり、東北に二つの橋あり、此川を豊宮川又の豊川ともいふ、昔の宮川おつゞきする川おて清流なりしとぞ、今の堀溝の如くおはな

れり、勅使上使もこゝへて下乗し、兵仗を解きて入るなり、それより二、鳥居三、鳥居等をへて、正殿の御門といふる、御門三、重なりて立り、第一を玉申御門次を蕃垣御門次を瑞垣御門といふ、参宮人ハ此御門の外へて拜とるなり、瑞垣の内正殿ハ左右ハ寶殿あり、朝家の幣帛又ハ御神馬の調度等を納めおく所なり、又正殿のうしろハ御門の左右ハ幣帛殿御饌殿あり、むろハ此ありハ八十ヶ所の末社ありハを、維新の後にとりこぼちよりといふ、高の宮ハ大宮の前南の山上にあり、伊吹戸主神と豊受大神の荒魂とを祭る、樹木繁茂して幽靜の地なり、外宮ハ大神を拜して、大神のを一へたまに豊受の神ハ御前をまつあふくある

朝夕に物くふごとにおやまひハ神の御前にたふそをろむ

こゝを出て間の山をゆく、兩宮の間にあればハいふ、古市場をとほりて宇治橋をこゝる、此川を五十鈴川又ハ御裳濯川といふ、橋をこゝり右

にをれて行けば、一、鳥居あり、外宮の一、鳥居よりこゝまで四十三町あり、一、鳥居を入りて右の方に洗手場あり、五十鈴川の流れなり、こゝにて手を洗ひ口をそぐ、此旁に祓所あり、古への勅使こゝにて修禊せしなり、それより二、鳥居を入りて右の方に子良館あり、俗におこら子といひ又ハ物忌ともいふ、朝夕の御饌を奉る童女の居る所なり、左ハ方に廳舎あり、神事を執行ふ爲に集會とる所なり、由基殿酒殿忌火屋殿などいと嚴おなり、少く高き所に荒祭の宮あり、これより冠木鳥居を入りて少く坂をたぼきハ正殿なり、前ハ小鳥居あり、又玉申御門蕃垣御門瑞垣御門等外宮と同じ、正殿の東西に寶殿あり、こゝむ二十二年ハ遷宮の年なるによりて、宮木おほくつゝおさねて、工匠神官などのあなごこなご行ひつゝ、事とりむれおふり、おのれらハ玉申御門ハ前に、まゝじもの膝折ふせてをろむとまつる、これまでまうで來つる神ハ御社の、いづれもハ

なふふと亦なふふととおぼえぬのあらねど、此大神の御前にをるゝ
むほどのことになふとくありて、又、年久におもひねんじふること
のなひて、なふ御前にぬるづくよとおもへばうれしきさのぎりなく、な
ごもこぼるゝありまなん、

年久におもひまふり大神の御前になふそぬるつきまつる

いく度ゝをるゝつれとふととおもふ心をつきせさりたり

小中村ぬふふふひまうでつるよゝをいひて、

玉くけふふふひまてもいそ川波のまらゆふくるうれし

神路山松のときはにつゝとあくる来てぬるつくも神のめくそ

あくて午後七時頃津にありて、若狭屋に宿と、

廿六日薄曇水午前七時三十分津を出づ、四日市までの十里あまりなり

といふ、上野白子神戸掛津なるハカウヘといひの村々をへて、追分にい

たる、是東海道の大路なり、午後一時あり四日市の吉田屋といふ瀛船
宿に着く、こゝへて湯ありて、食事をして、午後五時三菱の東海丸に乗る、
はじめえけ舟といふ小さき舟にて行くに、もと船までのやゝ遠かる
に、風少しありて舟の中に波うちいれ、汗ならねど袖のまどゝにぬれ
ぬ、三菱の船れこととりまかなふ人、また宿れあるじも見おくりて、此舟
のうちにあり、ほどなく本船にうつれば、風もなきて海路いとおどやか
なり、こよひの船中に寐る、

廿七日晴木夜あけて船の甲板にたぼりて、これバ、右ハ、伊豆の大島を
見、左に、芙蓉を望みて、海もおたやかなれ、いとこゝちよゝ、正午十二
時横濱に着し、川崎屋にて食事して、やゝて瀛車にて新橋にいたり、それ
より人力車をやとひて、我坂本ある家にかへりぬ、

賜暇遊覽終

4/35

一頁	在行誤	ありきハ
二十七頁	一行	用名天皇
四十一頁	一行	沼の向ひハ
四十六頁	三行	弘方
五十七頁	八行	文録
五十九頁	十一行	經藏ハ
八十五頁	一行	うらやうの
		藏經ハノ誤
		うノ誤
		賢ノ誤
		池ノ誤
		明ノ誤
		あるきノ誤

明治二十一年七月二十九日印刷
 明治二十一年七月三十一日出版

定價金貳拾五錢

著作者

東京府平民
 木村正辭

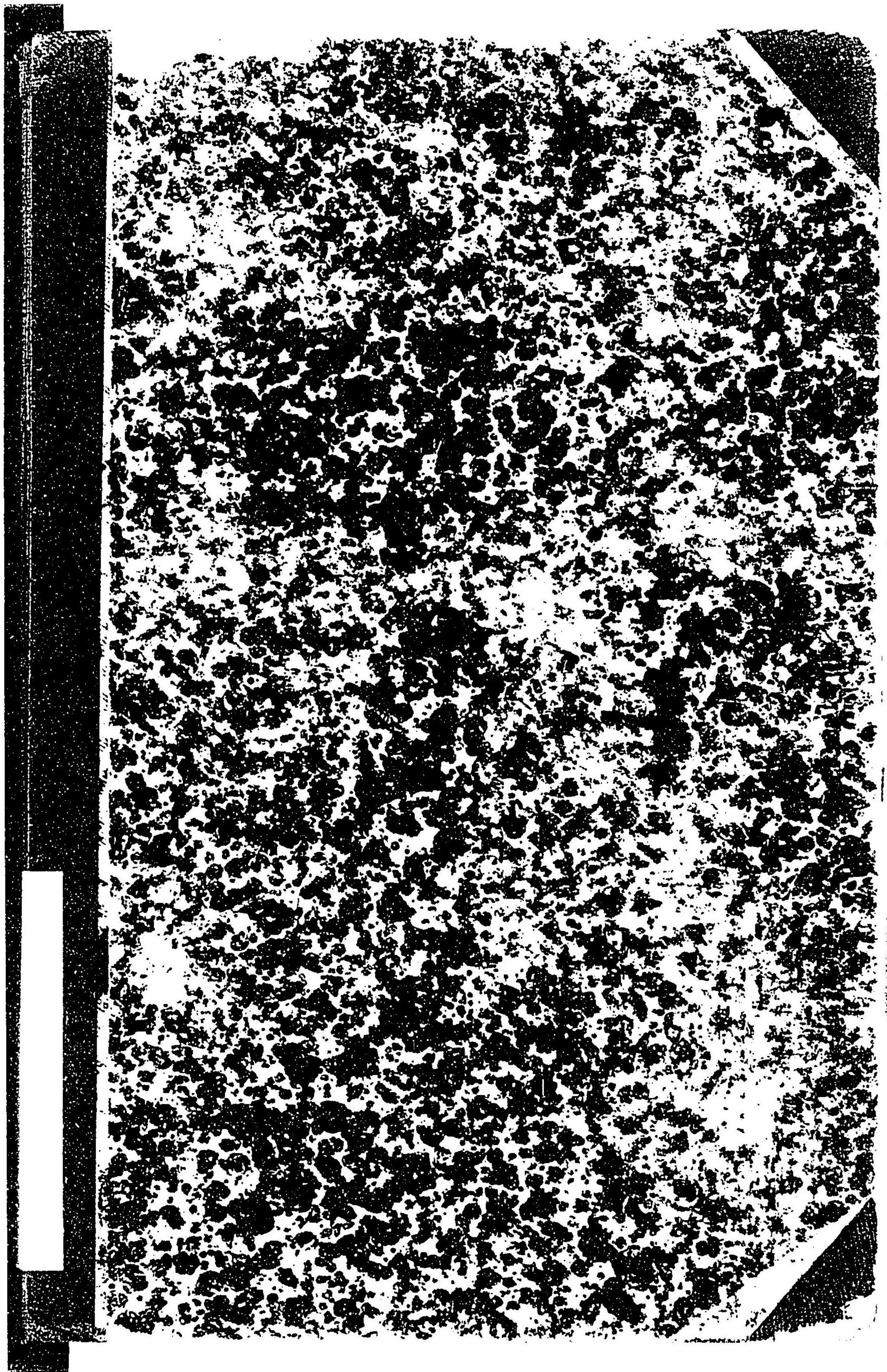
印刷兼
 發行者

兵庫縣土族
 長尾景弼
 芝區三田壹丁目
 三十六番地寄留

發行所

東京銀座四丁目	博聞本社
大阪備後町四丁目	全分社
千葉縣下千葉	全分社
埼玉縣下浦和驛	全分社
福岡縣下博多	全分社

19
29



025490-000-4

19-29

賜暇遊覽

木村 正辭/著

M21

ADC-2948

